

日本オリエント学会だより

- | | | |
|-------------|----------|------------|
| 1) 第63回年次大会 | 2) 学会奨励賞 | 3) 作文コンクール |
| 4) 広報委員会より | 5) 入会 | 6) 会員消息 |

1) 第63回年次大会

期 日：2021年10月30日（土）～31日（日）（オンライン開催）

会 場：大東文化大学

担 当：第63回大会実行委員会

委員長：高野太輔

委 員：栗山保之、福盛貴弘、松本弘、吉村武典

第1日 10月30日（土）

14：00～ 公開シンポジウム

16：00～ パネルディスカッション

17：00～ 第43回オリエント学会奨励賞授賞式

第2日 10月31日（日）

10：00～18：00 研究発表

参加者 181名（第1日）

168名（第2日）

プログラム

第1日 第327回公開講演会

公開シンポジウム「イスラーム初期史をどのように描くか」

・趣旨説明：橋爪烈（千葉科学大学危機管理学部・講師）

・横内吾郎（京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター（羽田記念館）・教務補佐員）

「史料論：いかにしてイスラーム初期史を構築するか」

・亀谷学（弘前大学人文社会科学科・准教授）

「ムハンマド：歴史学的研究は何をもたらしたか」

・橋爪烈（千葉科学大学危機管理学部・講師）

「正統カリフ：スンナ派イスラーム教徒の歴史観」

・清水和裕（九州大学人文科学研究院・教授）

「イスラーム帝国：保護／隷属の回路と『イスラーム』帝国」

パネルディスカッション

コメンテーター：後藤絵美（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・助教）

第2日 研究発表

研究発表者・題目

第1部会

1. 三木 健裕 紀元前5千年紀、ザグロス山脈南麓における彩文土器ネットワーク

2. 門脇 誠二・池谷 和信・近藤 康久

南ヨルダン、カルハ山の旧石器遺跡群近郊の水場に関する民族誌調査と地形解析

3. 堀岡 晴美 ニップル・イナナ神殿VII層奉納碑文とファラ文書に共通する人名
4. 川上 直彦 ウル第3王朝時代のシュメール北中部地域におけるティグリス川古代流路の復元—GIS分析による一考察—
5. 企画セッション1: Women and Ritual in Cult and Law of the Ancient Near East
 - Keiko Tazawa Re-examination of the Donation Stele for Ahmose-Nefertari as a God's Wife of Amun
 - Koichiro Wada Religious Roles of God's Wife of Amun in Ancient Egypt
 - Fumi Karahashi The NIN-dingir Priestess and Her Personnel in the Girsu E₂-MI₂ Archive
 - Ada Taggar Cohen The Hittite Case of Royal Women in the Cult: The Queen and the NIN.DINGIR (CTH 714// CTH 738)
 - Discussion

第2部会

1. 長尾 琢磨 パレスチナ自治区における第二神殿時代末期の埋葬の様相：考古学的踏査と分布調査に基づいて
2. 津村眞輝子・堀内 晶子・宮内 信雄・吉田 邦夫・宮田 佳樹
北シリア出土ビザンツ時代の土製ランプ—燃焼実験と脂質分析からの考察—
3. 田辺 理 新出エフタル銀器について
4. 内記 理 『大唐西域記』記載のタクシャシラの仏塔についての再検討
5. 企画セッション2: アッシリアにおける中心と周縁の関係性：楔形文字学，考古学，図像学から
西山 伸一 趣旨説明
(第1部:「中央」の建設)
山田 重郎 都市プランとイデオロギー：ドゥル・シャルキンの四角形都市プランの考察
柴田 大輔 新都カルフにおける神殿祭儀の創設
渡辺千香子 アッシリアの宮殿と石材
(第2部:考古学からみた「中央」と「周縁」)
沼本 宏俊 シリア，テル・タバン出土，中期アッシリアの巨大地下式煉瓦墓
西山 伸一 アッシリア東部辺境のエリート層埋葬と中央部の関係：ヤシン・テベの事例を中心に
小野塚拓造 鉄器時代IIB期の北イスラエルの物質文化：外来的要素とその背景
(第3部:中央における「周縁」の吸収)
伊藤 早苗 アッシリア王室書簡における使者
前島 礼子 「周縁」としてのバビロニア：文書蒐集事業を例に
菊地 咲 アッシリアにおける外国人の法的活動
佐野 克司 アッシリアにおけるエリート外国人の宮廷教育
津本 英利・長谷川修一 コメント
総合討論

第3部会

1. 森島 邦博・久野 光慧・眞部 祐太・北川 暢子・西尾 晃
ScanPyramidsプロジェクトにおけるクフ王ピラミッドの切妻構造背後を対象とした宇宙線イメージングについての報告
2. 河江 肖剰 クフ王の時代に考案されたピラミッドにおける切妻構造に関する考察
3. 竹野内恵太 供物儀礼における媒体間の関係構造—エジプト古王国時代の石製モデル容器と供物リストの対応関係—

4. 畑守 泰子 墓壁画からみた古王国時代の家族と女性像
5. 矢澤 健 幾何学的形態測定学から見たエジプト中王国時代末期の土器形状の地域性とその変化
6. 山崎世理愛 エジプト中王国時代以降における装身具を捧げる儀礼の伝統と再解釈
7. 肥後 時尚 古代エジプトの「死者の書」における「否定告白」についての一考察
8. 鈴木 慎也 マーラゴムワ貯水池から見た古代スリランカ貯水灌漑システムの崩壊原因についての一考察
9. 下山 繁昭 高句麗と日本をつなぐ滅人

第4部会

1. 早矢仕悠太 死地蘇生と村落共有地の運用をめぐる9世紀半ばマールク派法学の学説比較—Ibn Abī Zayd al-Qayrawānī 『Kitāb al-Nawādir wa-l-ziyādāt』を素材として—
2. 森山 央朗 シャーフィイー法学派「ハディースの徒」とハンバル法学派「ハディースの徒」:ハディースをめぐる11世紀の論争
3. 矢口 直英 『医学典範』注釈における哲学的問題
4. 法貴 遊 イブン・シーナーの論理学における全称命題について
5. 山本 孟 ヒッタイト文書における「魂」とその移動のイメージ
6. 青木 健 アーザル・カイヴァーン学派の起源
7. 成地 草太 イギリスからオスマン帝国への難民支援:1864年のチェルクス人支援委員会による募金活動と義捐金寄付
8. 石川 博樹 イタリアにおけるエチオピア人種・民族論の展開

第5部会

1. 宮川 創 古ヌビア語の母音音素体系と声調の再建:現代ヌビア諸語を手がかりとして
2. 五十嵐小優粒 ペルシア語における無対自動詞と無対他動詞に対応する使役動詞
3. 村上 武則 クルド語ソーラーニー方言における「ペシュメルガ」型の不定名詞表現の研究
4. 榮谷 温子 アラビア語文法における一般化と限定や種との関係
5. 徳永 里砂 初期イスラーム時代の碑文に見られる「プロト・ハムザ」について—サウジアラビア北西部ワーディー・アルヒルカの新資料の考察を中心に—
6. 竹田 敏之 アラブ詩における韻律学(アルード)の形成と展開:ハリール学派による15律式説を中心に
7. 佐藤 潤 北西セム諸語におけるQTL形動詞の文法化:歴史言語学理論に基づく状態動詞から動態動詞への発展
8. ヘバタッラー・オマル
エジプトにおける女子割礼をめぐるグローバル・ディスコースと現地の現実—日本とエジプトにおける変化の見通し—

第1部会

1. 紀元前5千年紀, ザグロス山脈南麓における彩文土器ネットワーク 三木 健裕
紀元前5千年紀のザグロス山脈南麓では、鈍黄色地に黒色の彩文が施された土器がスシアナ平原から東方へ拡散しており、様々な地域性が認められる。彩文土器が拡散し展開した背景として、遊牧民の移動、通婚等の人間の移動が主張されている。ザグロス山脈南麓各地域の彩文土器にみられる類似性と地域差は、彩文土器の受容と展開の地域差、彩文土器づくりに関わる人間の移動の実態を探る重要な手がかりだが、定量的検討はまだまだ乏しい。本発表では彩文土器の地域性に取り組む手段として社会ネットワーク分析を適用し、遺跡間での彩文土器

の類似性を視覚化した「彩文土器ネットワーク」の通時的変化を考察する。この考察を通して、彩文土器拡散の背景に存在した人間の移動の実態を探る。

分析対象はイラン西部デー・ルラン平原からイラン東部ケルマーン地方までの27遺跡から出土した、彩文土器の実測図や写真である。特に残存状態の良い、外面に彩文が施された鉢形土器1223点を抽出し、その文様構造を分析属性とした。この文様構造を12種類に分類し、遺跡間での各文様構造の類似度を、ブレynaード＝ロビンソンの類似度で定量化した。二遺跡間でこの係数が0.75以上の場合、その遺跡同士を線で結び、彩文土器ネットワークを視覚化した。彩文土器ネットワークの通時的変化を探るため、対象とする遺跡の時期を前期（およそ前6千年紀～前5千年紀前葉）、中期（前5千年紀中葉）、後期（前5千年紀後葉）に細分して、時期ごとにネットワークを比較した。

前・中・後期に彩文土器ネットワークを細分して通時的に比較した結果、前期から中期にかけて彩文土器ネットワークはデー・ルラン平原からファールス地方まで広範に展開するようになったこと、後期になると広範な地域間ネットワークが認められなくなることが示された。

以上の分析結果は中期における広範な彩文土器ネットワークの背景に関して、長・短距離間での陶工の移動または通婚の可能性の両者を支持している。一方で後期に地域性が強くなった背景には、より短距離間の移動による彩文土器伝統の拡散が優勢となった可能性が示唆される。だが本分析には遺跡数の少なさ、時期細分の問題、関係性を定量化する際の問題など、現時点では課題がまだ多い。今後は問題点を改善し、他の土器属性も対象としてネットワークを作成し、各ネットワーク間でパターンにどのような違いが見られるかを検討したい。

2. 南ヨルダン、カルハ山の旧石器遺跡群近郊の水場に関する民族誌調査と地形解析

門脇 誠二・池谷 和信・近藤 康久

南ヨルダンのヒスマ盆地は現在、年間降水量が50 mm以下の乾燥地帯であるが、旧石器時代の遺跡が100地点ほど発見されている。こうした内陸乾燥地の旧石器時代の人々は、湿地が広がるオアシスの近くに居住していたといわれているが、南ヨルダンのカルハ山近郊にはそうした湿地跡は見つかっていない。そこで、カルハ山において旧石器時代の人々がどのように水を得ていたかという問題に取り組むために民族誌調査と地形解析を行った。

民族誌調査では、現在のカルハ山近郊の居住者を対象にし、家畜（主にヤギ）の水飲み場の調査を行った。その結果、カルハ山のワジ沿いに10地点以上の水場があることが分かった。その多くは岩盤の天然のくぼみであった。調査を行ったのは2018年6月と2019年8月末（いずれも乾季）であるが、いくつかのくぼみに水が残っていた。以前の雨季の水と思われる。天然のくぼみ以外に、峡谷の堰き止めダムや、岩盤を掘りぬいた人工貯水槽もあった。それらはおそらくナバテア期以降の構築物である。

カルハ山の地形解析は、AW3D地形データ（解像度1 m）を用いた。その結果、天然の水場（岩盤のくぼみ）は、カルハ山中央の峡谷に集中していることが分かった。同様なくぼみは他の場所にもあるが、狭い谷に位置しているために水が集中してきて溜まりやすいのだと思われる。また、天然の水場となっているくぼみは、2.4 km²の集水域を待つ場所に集中している。一方、カルハ山より南の別のワジには天然の水場が確認されていない。このワジは幅広く開けていて砂が広域に堆積しており、岩盤の露出面積も限られている。

以上の様に、カルハ山の地形は、岩盤のくぼみに水が集中して溜まりやすい特徴があり、それが天然の水場として現在利用されている。こうした天然の水場は旧石器時代にも利用可能だったと思われる。峡谷の岩盤のくぼみが天然の水場として機能するカルハ山は、「峡谷オアシス」と呼べるかもしれない。それはこれまで知られていた「湿地オアシス」とは異なり、南ヨルダンの地形に特有のもので、それを旧石器時代から人々が利用していたと提案される。ナバテア期以降になると、峡谷にダムを築いたり、より町に近い場所に大型貯水槽を設けたりした。これは、水確保の技術が重層化したことを示すが、その変遷過程を明らかにするためには、旧石器とナバテアの間の時代（新石器など）も含めた検討が今後必要である。

3. ニップル・イナナ神殿VII層奉納碑文とファラ文書に共通する人名

堀岡 晴美

ニップル・イナナ神殿VII層出土奉納品の大部分はVIIB層(ED IIIa期)出土で、中には碑文が記されたものがある。碑文は①奉納先の神名②奉納者名③(奉納者の)配偶者名/父親名④「奉納した」(a mu-ru)の順で記されるが、必ずしも項目すべてが揃う訳ではない。ここでは判読可能な人名が見られる奉納品32点を取り上げ、ニップルより南45 kmに位置するファラ遺跡(古代名シュルツバク)出土文書に共通する人名が多数見られる状況の背景について考察する。(奉納品内訳は石製ボウル18点、石製容器(vase)5点、小像6点、peg 1点、ドア飾り板1点、粘土板1点)

イナナ神殿奉納者などの人名との共通人名は、ファラ文書の中でも大麦支給文書の一部と不動産売買契約文書に集中する。大麦支給文書は支給システムに基づき5グループに分類されるが、哀歌歌手(gala)を中心として祭礼に参加する女性神官や神官、笛吹(gi-di)集団を含む楽師団(dumu-dumu-lu₂-ad)、メッセンジャー(uru-DU)に伴われた未亡人(nu-SU)集団、ファラ行政センター職員(dumu-dumu-e₂-gal)などで構成される1グループがある。彼らは祭礼参加者と祭礼の運営に携わる役人であり、シュルツバクで催された祭礼や神像行列に関わった人々である。

人名が共通するだけでは同一人物とすることはできないが、女性奉納者14例中7例および男性奉納者18例中10例が、ファラ文書の中でも祭礼関係者への大麦支給文書と不動産売買契約文書という限られた分野の人名と共通する点で、両者にはなんらかの因果関係があると考えざるを得ない。ファラにはニップル・エクル神殿におけるアキティ祭へ向けた支出記録があり、シュルツバクからこのアキティ祭への参加が推測される。また古バビロニア期文学作品『ル・ディンギラから母へ宛てたメッセージ』の中にニップルでのアキティ祭の折にイナナ神殿で祭礼が行われた描写があり、アキティ祭がイナナ神殿における祭礼も包含していたことが分かる。イナナ神殿には工房で働く女性達がいたが、uru-DUに伴われた未亡人はイナナ神殿の祭礼に参加し、自身を奉納する形で神殿の働き手となったのではないだろうか。またアキティ祭には他都市や異国から多数の人々が集まる。そこでは耕地の取引があり、訪問者は祭りの期間中耕地内に居住したと言われる。ファラの不動産売買契約文書にも共通人名が見られるのは、アキティ祭での耕地および居住地取得が背景にあったと考えられる。

4. ウル第3王朝時代のシュメール北中部地域におけるティグリス川古代流路の復元—GIS分析による一考察—

川上 直彦

ウンマから発見されたウル第3王朝時代のシュメール語文献史料群における歴史地理学研究により、同時代のティグリス川古代流路およびその支流が、南メソポタミアのシュメール北中部地域に復元された。同見解の鍵となる文献史料は、ASJ 8 68-69, Istanbul 1615, Istanbul 2881, MVN 15 94, ウトゥヘガル王碑文(RIME E2.13.6.3), Sigrist Yale 1452, および他の同時代の関連文献史料となる。これらの史料から、ニップルの北北東20-25 kmの地点に位置していたと推定されるカサハラ近郊から、その下流に位置するアダブ、カルカル、そしてウンマ北西部近郊まで、ティグリス川古代流路が流れていた可能性が示されている。更には、カルカルからウンマ北西部近郊の中間地点から、イトゥルンガル水路が、ティグリス川古代流路の支流として、ウルク方面に分岐していた可能性も示されている。

歴史地理学研究によって復元されたこのティグリス川古代流路に関する見解を基礎に、地理情報システム(GIS)をつうじて、Shuttle Radar Topographical Mission (SRTM) 数値標高モデル(DEM)を用いて、南メソポタミアのシュメール北中部地域の立体地形図をGIS上に描写・活用し、同地域に判読可能なティグリス川古代流路跡とその支流が実在するのか比較検証を行った。更には、同地域のウル第3王朝時代に年代付けされている遺丘のみの分布図を作成し、その分布図をGISを用いてSRTM DEM立体地形図上に座標系と座標を調整して同じ位置に重ね合わせ、ティグリス川古代流路跡と判読可能な古代河川流路跡とウル第3王朝時代の遺丘の分布状況の位置的関係性の比較検証も実践した。

その結果、歴史地理学研究により復元されたティグリス川古代流路とその支流のライン上に、ほぼ一致する古代河川流路跡が存在することを実証することができた。また、この判読できたティグリス川古代流路跡が、ウル第3王朝時代の南メソポタミアのシュメール北中部地域の中心を流れていた唯一の古代河川であることも定義することができた。

5. 企画セッション1: Women and Ritual in Cult and Law of the Ancient Near East

Organizer: Ada Taggar Cohen

In the last decade, the study of ritual has taken an important place within the study of Ancient Near Eastern societies. The interpretation of royal political activities has extended widely, and new studies of specific festivals came out, including the recent two volumes on the Mesopotamian rituals: *The Akītu Festival: Religious Continuity and Royal Legitimation in Mesopotamia*, by July Bidmead (Gorgia Press 2014) and *Ritual, Performance, and Politics in the Ancient Near East* by Lauren Ristvet (Cambridge Press 2015), and the very recent volume in the Handbook series of Oxford University Press edited by Samuel E. Balentine, *The Oxford Handbook of Ritual and Worship in the Hebrew Bible* (2020), which includes chapters on Mesopotamia, Egypt, the Hittites, the Levant, and the Greeks. As part of this research endeavor into understanding the function and role of festivals and cultic institutions in those ancient societies, the session looked into the role of royal women in the rituals and cult of the Ancient Near East. The speakers presented specific textual evidence from Egyptian, Mesopotamian, and Hittite cultures, and offered a fresh look at how ritual activities reflected and impacted mainly royal women's place in the cult, in politics, and probably in society in general.

The session was composed of four presentations: two on Egypt, one on Mesopotamia and one on the Hittite kingdom. The two presentations on Egypt discussed the cultic position of the wife of the pharaoh. During the discussion time, a very active exchange took place, and although the presentations discussed three different cultures, it was pointed out that there were interesting similarities in the positions, power and treatment of the royal priestesses – queens and princesses – in those ancient texts.

5-1. Re-examination of the Donation Stele for Ahmose-Nefertari as a God's Wife of Amun Keiko Tazawa

This paper discussed a particular legal document in ancient Egypt, '*imyt-pr*,' by re-examination of the so-called "Donation Stele." This stele was constructed by king Ahmose I, the founder of the Eighteenth Dynasty (16th–13th centuries BCE), when his wife Ahmose-Nefertari was formally inaugurated as a God's Wife of Amun. In the line with our session theme –Women and Ritual in Cult and Law of the Ancient Near East–, it was especially proposed to discuss this stele from the juridical viewpoint focusing on '*imyt-pr*.'

'*imyt-pr*' literally means "that which is in the house" in ancient Egyptian. This document is said to be a legal instrument known as early as the Third Dynasty (27th century BCE) and frequently translated as 'will' and 'testament' concerning the transfer of personal items and real estate from one individual to another. Recent studies have tried to define '*imyt-pr*' much clearer by some word of our time, however, it turned out that there would be no conclusive translation and that it therefore would be better to leave this word '*imyt-pr*' untranslated. This is understandable based on the circumstances that the study of law in ancient Egypt, especially during the pharaonic period, is hampered by the lack of comprehensive legislation such as the Code of Hammurabi in Mesopotamia and a sort of compilations of case law. We have to admit that our knowledge of ancient Egyptian law is limited and incomplete. It is also warned to avoid applying contemporary categories and terms without taking into account the differences of legal concepts between the Egyptians and us today. We are also required not to extend the data applicable to the

limited area and time in ancient Egypt to the entire land and all the periods of Egyptian history.

Nevertheless, one of previous studies, apart from never-ending discussions about translation or definition of '*imyt-pr*,' indicated that in actual legal documents separated from literary compositions and religious references from the Old Kingdom to the New Kingdom, '*imyt-pr*' was never composed on behalf of a man's elder son who normally inherits his father's property. After some discussions restricting to legal texts not including literary and religious texts again, it is concluded that '*imyt-pr*' was written when the eldest son would not receive the property, which was an irregular style of transfer of property. Also, it is pointed out that '*imyt-pr*' transferred not only possession (own) of property but also legal right to bequeath of relevant property.

From the viewpoint of the nature of '*imyt-pr*' summarised in the previous paragraph, it would be likely to consider that '*imyt-pr*' transfer in the Donation Stele of Ahmose-Nefertari seemed to be an essential measure because the office of second priest of Amun would have been taken over by the son of the predecessor, namely last officeholder, automatically in normal cases without written, sealed, and recorded transfer document. It also could be possible to say that '*imyt-pr*' transfer in this stele made one of important religious position private matter for royal family intentionally or even unintentionally.

5-2. Religious Roles of God's Wife of Amun in Ancient Egypt

Koichiro Wada

God's-wife of Amun is a well-known title of queens and princesses in the later part of dynastic Egypt. The title appeared in the early 18th Dynasty, and it became an important position in the administration of the Theban region in the Third Intermediate period onward. The studies of this position tend to focus on its political roles, because God's-wives in the Third Intermediate Period were key figures for the royal control over the Theban region as well as the priesthood of god Amun-Ra at Karnak. On the other hand, their religious roles were not so clear. This presentation focused on this point.

Firstly, we looked at the decorations of the Red Chapel of Queen Hatshepsut. This building was constructed as a barque shrine that was used to put a sacred barque down during the festivals of the god Amun-Ra. The main building material of the chapel is red granite blocks, so that the building is called the Red Chapel nowadays.

This chapel is decorated with the scenes of some festivals such as Opet festival and Sed festival, and other religious events, which were held by Hatshepsut, and a god's wife appears in some scenes.

The chapel was dismantled and its blocks were reused in other buildings in dynastic time, so there are many blanks of wall decorations. God's wife appears on the north inner wall of the chapel. The name of the god's wife does not show in the decoration of the chapel, but she is almost certainly princess Neferu-ra, a daughter of Hatshepsut. She appears in scenes of daily rituals in the temple in which she bathes in the sacred lake with a god's father, which was an important priestly position, before adoring the gods.

There is an interesting scene in which god's wife receives fire in the upper register and an enemy figure in the lower register, respectively. This scene depicts god's wife carries out the execration ritual. The execration ritual in dynastic Egypt was mainly carried out to destroy national enemies who lived in and around the Nile valley. In this ritual, enemy's figure usually made in beeswax were burned and buried in the ground for symbolic "killing of enemies."

We moved to another building where is located next to the sacred lake at Karnak. This building was constructed by king Taharka in the 25th Dynasty. The most part of the superstructure of the building is lost, but the building has also underground chambers and a god's wife appears in its wall decorations.

The god's wife in this building, who is most probably Shep-en-wepet II, a daughter of King Piye, appears with the king Taharqa in the Ritual of protection of the Osiris' tomb. The tomb of the god is located in the middle of

the scene, (It is depicted a mound and an acacia tree on it) and the king and the god's wife are depicted on the both sides of the tomb. In the scene, god's wife shoots four arrows into four targets, and king Taharqa throws four balls. These four objects are symbolically toward the four cardinal directions. Therefore, the scene can be interpreted as the king and god's wife both serve to protect the Osiris' tomb on all directions from chaotic entities.

The related representation of god's wife to the protection rites of the Osiris' tomb is the offering of Maat, the principles of world order that were established by the solar god at the beginning of time. This depiction means dedicators promise the gods to keep social stability of the kingdom. From the 22nd Dynasty, god's wives are depicted offering of Maat to the gods, an activity usually carried out by kings. Offering of Maat as well as the protection of the Osiris' tomb show god's wives play same roll to the king, that is, maintenance of the world order.

As a result of this small survey, we can show the following notions; god's wives carried out the national rituals that were originally performed by kings. This tendency is particularly clear in the late Third Intermediate Period. It seems to suggest that the religious roles in the national rituals of god's wives had increased and they performed equivalent to kings. On the other hand, it is unclear whether god's wives engaged daily rituals at all times. It is possible to assume that a deputy attended daily rituals at all times. It is possible to assume that a deputy of god's wife attended daily rituals, in the same way to high priest who acted as a deputy of king.

5-3. The NIN-dingir Priestess and Her Personnel in the Girsu E₂-MI₂ Archive

Fumi Karahashi

Ereš (NIN)-dingir Priestesses, who are attested in different areas in the ancient Near East, present a quite complex picture. They were appointed to a variety of gods and goddesses. One of the ereš-dingir priestesses whose activities were well documented is the ereš-dingir of the goddess Baba in the Ur III period. It is known that she had a large household, fields and gardens, sheep, etc. and took part in all kinds of economic activities. According to Kazuya Maekawa (1996), the Ur III ereš-dingir of Baba was the wife of the governor of Lagash, and her house is nearly synonymous with E₂-MI₂ ("the house of the woman") in Presargonic Girsu documents, which are the sources of this study. Scott Beld (2002) took the E₂-MI₂ as a cult-institution that was under the responsibility of queen, who apparently assumed the position of the ereš-dingir of Baba, and understood that her role was to achieve social integration of the city-state. Along the lines of Beld's interpretation, this paper addresses the Lagashite queen's likely involvement in the managing of the music personnel, music being integral part of cults and festivals that she presided.

The so-called "ereš-dingir ration texts," which recorded food and oil distributions at the Festival of Baba to the ereš-dingir herself and her men, distinguished women including queen's mother and king's sisters who were referred to as lukur-priestesses, other royal members, and professionals including the music personnel, are of interest because they show these musicians as participants of the festival of which the ereš-dingir of the goddess Baba was the main character. It is reasonable to assume that these musicians performed at the festival, and that might be corroborated by an iconographic representation in which an EN-priestess (equivalent to ereš-dingir) are depicted together with a drum and two female drummers although it comes from a somewhat later period. In the ereš-dingir ration texts the music personnel—a total of nine—were mentioned by name and title: three female and one male players of the holy drum (lu₂-geme₂-ub₅-ku₃-ga), two male musicians (nar), one chief musicians (nar-gal), and two lamentation cantors (gala). We know from other documents that the two cantors were allotted land by the E₂-MI₂, and that one of them was perhaps queen's brother. Other documentations of our interest are those that recorded the purchase of gala-cantors by three successive queens, wives of the last three kings of Lagash. These examples may imply that the queen herself took the initiative to see that vacancies for gala were filled. Taken together, these documents show the close relationships between the music personnel and the queen/ereš-dingir

priestess, which were clearly related to the queen's responsibility for organizing religious festivals.

5-4. The Hittite Case of Royal Women in the Cult: The Queen and the NIN.DINGIR (CTH 714//CTH 738)

Ada Taggar Cohen

The presentation covered the following five points: 1) An Introduction to Hittite rituals and festival texts; 2) Hittite royals in the priesthood; 3) The ritual of the Hittite queen to IŠTAR (CTH 714); 4) The ritual of the NIN.DINGIR to the goddess Tetešhapi (CTH 738); 5) Royal ideology in the rituals performed by these priestesses.

Hittite ritual texts are “prescriptive” texts. They were recorded on clay tablets and copied over several hundreds of years by the royal scribal administration, with the aim of dictating to its personnel how to perform cult procedures. For this reason, neither the queen nor the NIN.DINGIR are mentioned in ritual texts by their personal names. Both were considered to be acting in their capacity as priestesses, albeit royal ones. Both their titles were written Sumerographically, the queen as MUNUS.LUGAL and the priestess as NIN.DINGER, and they were inscribed in two kinds of texts: state festivals, and special rites conducted by them in rituals other than state festivals.

Hittite royal figures called themselves “servant of the gods” and even more explicitly “priest of the gods” or “priestess of the gods.” However, some scholars are skeptical about the priestly functions of royals, and consider it to be theoretical. The two texts that were presented tackled this question and shed light on the ideological function of the rituals. In the prescribed festivals the queen and the NIN.DINGIR were instructed to either be dressed in the deity's clothes in advance, or don them during the ritual. I emphasize this act of resembling the deity for its symbolic status of both the queen and the NIN.DINGIR.

CTH 714, a ritual to be performed by the Hittite queen, prescribes a monthly festival to the goddess IŠTAR of Nineveh, who in Hittite was named after the Hurrian IŠTAR, that is Šauška. The ritual offers a look at the very priestly actions of a queen as a priestess: she does the washing of the body of the goddess (i.e. its statue) and she pleases the goddess with food and music. She then evokes the goddess by praying to her, requesting relief from illness or sickness for the royal family or for the land. This was regarded by the Hittites as the proper way of serving the gods. CTH 738 is a specific festival in which the NIN.DINGIR is the main actor, although other royal worship together with her, including the king, the queen and the crown prince. In this state festival to the goddess Tetešhapi, a Hattian goddess, she travels between temples around the country, accompanied by cult personnel, to venerate the goddess. She offers the goddess and specifically dances alone in front of her statue.

These two texts offer a glimpse at the Hittite cultic royal ideology. They represent the two major religious traditions coexisting for the royal house of Hattuša: CTH 738 the Hattian and CTH 714 the Hurrian tradition in both cases venerated by the female members of the family.

第2部会

1. パレスチナ自治区における第二神殿時代末期の埋葬の様相：考古学的踏査と分布調査に基づいて

長尾 琢磨

本発表では、第二神殿時代におけるユダヤ人の思想・物質文化のヘレニズム化を考察するべく、ユダヤ人の墓であるロクリ墓の分布を検討した。第二神殿時代のユダヤ人居住域は、現在はイスラエルとパレスチナ自治区に区分され、特に後者の地域は考古学的・政治的な状況から考古学的情報に乏しい状態である。そのため、本発表ではパレスチナ観光省・考古局に聞き取り調査を行い、特に最も情報が不足しているユダ・サマリア地域の墓に関して考古学的踏査を合わせて行うことで、パレスチナ自治区における第二神殿時代末期の墓の分布を検討した。

パレスチナ観光省・考古局によって遺跡の数や状態を確認するプロジェクトが進められており、ヘレニズム時

代からローマ時代を利用期間に含み墓を有する遺跡は94遺跡確認された。しかし、これらは墓の存在だけが判明している遺跡であり、墓の盗掘の多さからほとんどの墓が遺物を欠いている状態であるため、年代は明らかではなかった。また、パレスチナ観光省・考古局による墓の救出調査 (salvage excavation) も行われているが、パレスチナ観光省・考古局には独自の報告書や雑誌を刊行する体制はなく、未整理・未報告の資料が多く存在している状況であった。総じて、パレスチナ自治区の墓に関する情報は踏査レベルでも十分ではなく、その分布は不明瞭なままであることを確認した。

以上を踏まえて、十分な情報を得るためユダ・サマリア地域間の5遺跡に関して考古学的踏査を行い、三次元測量によって墓の情報を記録した。そして、その成果を過去の調査報告と合わせることで、第二神殿時代末期のユダ・サマリア地域間の墓の分布を検討した。前2世紀のロクリ墓の利用はエルサレムに限られ、前時代にも利用されていたベンチ墓がユダ地域周辺で利用されていた。前1世紀になるとエルサレム以外のユダ地域の遺跡でもロクリ墓が利用されるようになり、1世紀以降はユダ・サマリア地域間でもロクリ墓が利用され、広く分布するようになった。以上のことから、初期のロクリ墓はユダ地域周辺に集中しており、ハスモン朝の領土拡張に合わせてロクリ墓が広がっていく可能性を示した。

2. 北シリア出土ビザンツ時代の土製ランプ—燃焼実験と脂質分析からの考察—

津村 眞輝子・堀内 晶子・宮内 信雄・吉田 邦夫・宮田 佳樹

北シリアのユーフラテス川中流域から出土した5～7世紀の土製ランプをもとに、当時のランプがどのように使われたのかを、特に燃料の油に注目して考察した。対象としたのは、古代オリエン特博物館シリア考古学調査団が1974～80年に発掘調査したユーフラテス川中流域東岸 (ルメイラ・ミシヨルフエ地域) から出土した資料である。なかでもルメイラ地区E2号墓 (地下式横穴墓) は一つの墓から土製ランプが61点出土した。その約半分が古代オリエン特博物館に分与されており、分析等を進めている。

確認できる全てに煤が付着しており、火は灯されたことがわかる。火口の煤の放射性炭素年代測定で紀元後421～537年 (95.4%) という暦年校正結果が出ている。8点の残留有機物分析を実施した結果、高温で燃焼すると発生する成分や長期間燃焼した際に発生する成分はほぼ確認されなかった。したがってランプの火は長時間ではなく、繰り返しでもない可能性が示唆され、昨年公表した。油脂は植物性脂質と推定できたが、抽出したパルミチン酸・ステアリン酸の分子レベル炭素同位体組成を現生日本産生物と比較すると、この時代・地域でランプの燃料として考えられるオリーブオイル単体 (C_3 植物) より高い値が出た。燃焼実験を行った結果、燃焼プロセスの間に同位体比が変化する顕著な事象は出なかった。したがってオリーブ油ではないか、または別の植物性のものを浸していた可能性が考えられた。ほぼ全てに植物性の香油成分が検出されていることも注目される。

E2号墓出土ランプをA～Dの4種類に分類すると、Cタイプ (円形ロクロ製) が5割、Bタイプ (平たい型製) が3割を占める。水量から割り出した油量はBタイプで5～10 g、Cタイプ約10 gである。日常使いのローマ時代、イスラーム時代のランプは30～100 gの油が入ることを考えると非常に少ない。3Dデータを利用した土製複製品を用いて綿芯で燃焼実験をした結果、1時間～1時間30分程度、炎が継続した。1回の燃焼で火口に煤が付着することも確認できた。したがってE2号墓出土のランプの多くは数時間灯す程度の埋葬用に作られたランプであり、特にロクロ製のCタイプは胎土も荒く、地元製の可能性が高い。今後は胎土分析なども進め、住居址も含めた他の遺跡から出土したランプについても俯瞰的にみながら、ユーフラテス川沿いの埋葬習慣について検証していきたい。

3. 新出エフタル銀器について

田辺 理

エフタルは、5世紀から6世紀にかけて中央アジアで活躍した遊牧民である。エフタルについて記した史料は少ないが、最近では、エフタルやフンが発行したコインを収集したカタログが相次いで出版され、注目されている。また、エフタルに関係する美術作品も中央アジアや中国から若干出土しているが、王の胸像を刻印した銀貨や、銀器にほぼ限られている。

最近、これまで知られていなかったタイプのエフタル銀器が1点我が国に招来された。この新資料は、研究資料の少ないエフタル美術及び文化の研究の進展に貢献できる非常に貴重な作品であるので、本発表では、若干の考察を加え、紹介した。

この新出銀器は、葡萄酒を飲むための杯と考えられる。法量は高さ15.5 cm、重さ471 gである。口縁部分は厚く丸みを帯びており、頸部は一列おきに鍍金されている。肩の部分で頸部と本体を銀蠟付けによって接合している。胴部には打ち出し技法で、3人の男性がそれぞれ牡牛、ライオン、猪と素手で格闘する姿が表されている。

牡牛、ライオン、猪と素手で格闘する神ないし英雄として、ギリシア神話に登場するヘラクレスの十二の功業が想起される。ヘラクレスの十二の功業には、ネメアーのライオン、エリュマントスの猪、クレタ島の牡牛を退治する物語がある。本発表では、ギリシア・ローマ美術に見られるヘラクレスの同上神話を表した陶器画や石棺彫刻、モザイクなどと比較を行い、銀器の胴部に表された図像を、ヘラクレスの十二の功業の物語を表したものであると比定した。

最後に、ササン朝ペルシア、クシャノ・ササン朝、エフタルなどの銀器に描写された王侯像と比較考察を行った。特に、他のエフタル銀器には、二重線による衣服の襞の表現、上方に翻るマントやショールなどの表現、ディアデムの表現が見られる。これらの表現は、本作品に描写された人物像の服装の表現と共通することから、本作品をエフタル支配下のアフガニスタンないしは隣接地域において、5世紀から6世紀頃に制作されたものであると結論した。

4. 『大唐西域記』記載のタクシラの仏塔についての再検討

内記 理

7世紀前半にタキシラを訪れた玄奘は、『大唐西域記』においてタキシラの都城およびその地域にあった仏塔として3点を記録した。1点目は、将来、「四大宝蔵」の1つが現れる地点に建てられたものである。2点目は、「施頭」の伝説を記念した仏塔である。3点目は、アショカ王の息子のクナーラが自身の目を取りだした場所を記念するための仏塔である。

J. マーシャルはこれらの3つの仏塔を、「タクシラ」にある各仏教寺院遺跡の仏塔址に比定した。1つ目はバオティ・ビンド村脇の尾根の上にある遺跡に、2つ目はサルダ丘陵の上にある遺跡、すなわちバツラル塔に、そして、3つ目はハティアル丘陵の北斜面にある遺跡、すなわち「クナーラ塔」に、それぞれ比定した。しかしながら、地域で最大規模を誇るダルマラージカー仏寺址の大塔は、彼が比定した遺跡の中に含まれない。奇妙に思われる点は、都市と「クナーラ塔」の位置関係がおかしいことに加え、「クナーラ塔」がより際だった規模を持つダルマラージカー塔の近く（わずか1 kmの地点）に立地することである。ダルマラージカーが玄奘の時代にすでに廃絶していたためにダルマラージカーが記録されなかったと考えることは適切ではない。なぜなら、彼はその地域で廃絶した仏塔を1点記録しているためである。それは、「四大宝蔵」の中の1つが現れる地点に建てられた仏塔である。

本発表では、「タクシラ」にある各仏塔の規模を整理し、また、それらの中で際立った規模を持つダルマラージカー大塔が、7世紀時点でどのような状態にあったかを考古学的な情報を整理しながら確認した。その上で、「タクシラ」周辺でこれまでに記録された遺跡を改めて確認した。以上の分析を踏まえて、7世紀におけるタクシラの都城と仏塔の位置関係について再検討をおこない、都城の立地をポトハール高原の中に求めた方が、より整合性の取れた説明が可能であることを示した。

5. 企画セッション2：アッシリアにおける中心と周縁の関係性：楔形文字学，考古学，図像学から

オーガナイザー：西山 伸一・柴田 大輔・山田 重郎

アッシリアは前2千年紀後半から前1千年紀前半にかけてメソポタミア北東部のティグリス・ザブ川流域——特にアッシュル市・ニネヴェ市・アルベラ市の三角地帯——を中心に西アジアに広く支配を広げた国家である。とりわけ前9世紀中頃からは急速に周縁広域に領土を拡大し、前8～7世紀にはザグロス・タウルス山脈から地中海・ペルシア湾沿岸まで及ぶ広大な版図を統治下におき、西アジア史上、有数の大帝国を築き上げた。本セッションはこのようなアッシリアにおける中心と周縁の関係性に着目しながら、その政治・社会・文化の諸相について楔形文字学，考古学，図像学などの視点から議論した。

アッシリアの中心と周縁に関する従来の研究はこの国家による領土統治の制度をめぐる問題に集約されてきた。しかし、近年になり周縁地域での考古学上の新たな発見が相次ぎ、またさまざまな学問分野の「協働」によるアッシリア研究が進展するにつれ、中心と周縁をめぐる問題がより幅広い社会と文化の領域において極めて重要な役割を果たしていたことが判明しつつある。

このような研究現状を踏まえ、本企画セッションは日本人研究者によって行われてきた研究成果を分野横断的に比較し、議論を深めた。セッションは、第1部：「中央」の建設，第2部：考古学からみた「中央」と「周縁」，および第3部：中央における「周縁」の吸収，から構成された。セッションでは、エリート層の埋葬習慣，物質文化の比較，帝国の通信制度，宮廷における外国人エリートの教育，帝国中央部に移住した外国人の結婚，新帝都の神殿祭儀，都市プランとイデオロギーなどといった研究課題が取り上げられた。研究発表後，隣接地域の考古学・歴史学に取り組む専門家からコメントを受け，総合討議において取り上げた各課題について議論を深めた。

(西山 伸一)

第1部：「中央」の建設

5-1. 都市プランとイデオロギー：ドゥル・シャルキンの四角形都市プランの考察

山田 重郎

アッシリア帝国の建設者サルゴン2世（在位前722-705年）は、170年以上も王国の首都として機能したカルフ（現ニムルド）に代わる新首都としてドゥル・シャルキン（「サルゴンの砦」の意，現コルサバード）を建設した。しかし，新首都の完成後ほどなくしてサルゴンはアナトリアで戦死し，その死体はアッシリア本国に戻らなかったため，ドゥル・シャルキンは不吉な都として忌避され，サルゴンの子センナケリブ（在位前704-681年）はニネヴェに首都を移した。こうして帝国首都ドゥル・シャルキンは短命に終わったが，帝国支配者の居城として更地に一挙に建設された正方形の都市プランは，サルゴン2世の政治的・宗教的イデオロギーを鮮明に反映している。

ドゥル・シャルキンの正方形の都市プランは，アッシリア中心地域においてカル・トゥクルティ・ニヌルタ，テル・イブラヒム・バイス，バラワトなどに類例があり，新たに建設された計画都市の形状の一つの典型であったと思われる。中心都市としての伝統を持たない場所に建設された新構想都市ドゥル・シャルキンの建設に込められたサルゴンの政治的・宗教的イデオロギーを特に雄弁に物語っているのは，その市壁と城門の名称である。サルゴンの複数の碑文によれば，二重の市壁の名はアッシュルとニヌルタに因む祭儀名で呼ばれ，8つの門には，シャマシュ，アダド，アヌ，ムリッス，エンリル，イシュタル，エア，ペーレト・イリーという8柱の神々にちなんで実名と祭儀名が付けられた。これによって，アッシリアの最高神アッシュルとその息子であり王の化身とされたニヌルタを筆頭とする主要なメソポタミアの神々が都市を守護することが主張された。ここで注目されるのは，「地誌文書」Tin.tir = Bābīluに記された同時代のバビロンの市壁の8つの門のうち「王の門」を除く7つの門がことごとく神々（ウラシュ，ザババ，マルドゥク，イシュタル，エンリル，アダド，シャマシュ）の名で呼ばれる事である。おそらく，サルゴン2世は，ドゥル・シャルキンをバビロンに匹敵するメソポタミア世界の中心として位置づけようと企図し，バビロンに倣い，市壁と城門を神々の名によって命名し，王宮をシュメル語で

Egalgabarinutukua（「並ぶものなき王宮」の意）と名付けたものと思われる。

5-2. 新都カルフにおける神殿祭儀の創設

柴田 大輔

アッシュルナツィルバル二世（在位前883-859年）はその前任者たちの政策を継承して旧領土の再統治に成功し、大帝国建設への第一歩を踏み出した。なかでも特筆すべき彼の事業がカルフ（ニムルド遺跡）への遷都だった。大ザブ川とティグリス川の合流点近くに位置したかつての行政州都カルフの廃墟に、アッシュルナツィルバル二世は新たな巨大都市を建造し、アッシリアの故地アッシュルにあった王宮をこの新都に移転した。以後、サルゴン（在位前721-705年）が新都ドゥル・シャルキンを建造するまでの約170年間、カルフはアッシリアによる領土統治の中枢であった。一方、アッシリア国家祭儀の中枢は、国家神たるアッシュル神を祀るアッシュル市に留まり、ほか、アッシュルに続く重要な中心都市だったニネヴェとアルバイルも国家祭儀の拠点を保持した。

本発表はカルフの祭儀面に着目し、新都建設に際してアッシュルナツィルバル二世政権が実施した神殿祭儀の政策、旧来のカルフにおけるローカルな祭儀の連続性と断絶、そしてアッシリア国家祭儀全体におけるカルフの位置付けに光を当てる。この問題に情報をもたらす主な史料は、ニムルド遺跡から出土した神殿の建築遺構、そしてアッシュルナツィルバル二世の王碑文である。実務文書（行政記録・法文書・書簡）と祭儀文書は前8・7世紀のものが多数知られるが、同時時代のものはほとんど発見されていない。本発表では神殿建築遺構とアッシュルナツィルバル二世の王碑文を比較検討し、上記の課題に取り組む。

アッシュルナツィルバル二世はカルフに新しい大複合神殿を建造し、古くからカルフに祀られていたが当時は廃れてしまった神々の聖所をそこに再建した。しかし、これら古い神々を最も重要なカルフの守護神の地位にはつかなかった。アッシュルナツィルバル二世はそれまでカルフになかったニヌルタの聖所を大複合神殿の中心に設け、その神像を建立し、その大祭の詳細も決定し、この神をカルフの守護神として祀った。通例、ある都市における神々の祭儀はその都市の統治体制が変化しても継承され、また都市が政治的に重要になった場合はその都市の守護神の神学的地位が高められたが、アッシュルナツィルバル二世はこの慣例には従わず、新帝国の都にふさわしい守護神として、国家神アッシュルの嫡子ニヌルタを新たに「勧請」した。

5-3. アッシリアの宮殿と石材

渡辺 千香子

新アッシリア時代の約250年の間、ニムルド、コルサバード、ニネヴェの都で建設された宮殿の装飾に多くの石材が使われた。装飾目的に使われた石材は、薄い石板状に加工されて壁面や床面に設置され、多くの場合、表面に彫刻が施された。このようなアッシリアの彫刻作品について、今日、図版解説や博物館展示品の説明パネルには、原材料名として「雪花石膏」「アラバスター」「石灰岩」といった名称が混在して使われる。同じ作品の材料が文献によって異なることもあり、石材の実体について混乱が認められる。石材に関する自然科学分野の先行研究には、1922年のロイシュ、1953年のミドルミス、モスト、クラリングブル、1987年（2002年出版）のミッチェル、ミドルトン、2002年のピアンチェッティによる研究がある。アッシリア学では、1978年のリード、1991年のラッセル、1997年のポストゲイト、1999年のモーリーによる研究がある。新アッシリア時代の宮殿彫刻に使われた石材の大部分は石膏岩であり、石灰岩製の浮彫は非常に稀で、これまでに知られる限り、ニネヴェ南西宮殿の第33室を中心とする一画に使われただけである。センナケリブの王碑文はニネヴェ南西宮殿の装飾に使われた石材の産地に言及し、「タスティアテ」、「バラタイ」、「ニブル山」、「カブリダルギラー」、「アンマナーナ山」という異なる採石場が記録された。石材の特徴から、南西宮殿第33室の浮彫（「ティル・トゥーバの戦い」等）には、ニブル山麓で発見されたペンドゥー石が使われていると考えられ、この石材は第33室の入口に置かれていたスフィンクス像や第29, 30室の壁面にも設置されていた。

第2部：考古学からみた「中央」と「周縁」

5-4. シリア，テル・タバンの出土，中期アッシリアの巨大地下式煉瓦墓

沼本 宏俊

シリア北東部ハブール川中流域にあるテル・タバンの遺跡での1997～2010年に行われた計10回調査では，中期アッシリア時代（前13～11世紀）の約500点の文字資料が発見され，同流域の統括拠点タベトゥであったことが実証された。

2006年度の調査で発掘した中期アッシリアの地下式焼成煉瓦造墓は，シャフト墓で竪坑（長さ1.1 m，幅1.5 m，残高0.7 m），坑道（長さ2.2 m，幅1.5 m，高さ1.45 m），前室（長さ1.3 m，幅1.3 m，高さ1.1 m），主室（長さ6 m，幅3 m，残高2.2 m）で構成され，床プランは竪坑・坑道・前室が主室に直交するL字型を呈していた。墓は古バビロニア時代の層を掘り込み設置され，盗掘を受け主室の天井部は破壊されていた。構造上の特色は石基礎に焼成煉瓦積み，坑道・前室・主室の天井部はヴォールト架構，主室の南北両壁の中央部には天井がヴォールトのニッチ（約60×50×50 cm）が設置されていたことだ。さらに築造当初は竪坑部を除く全床面は煉瓦敷きで，坑道・前室・主室の全壁面及び天井と煉瓦敷きには石膏が塗られていた。主室の床面付近からは，副葬品品の残骸の金製や貴石製のビーズ類と人骨片が出土した。墓の被葬者は主室の床上に堆積した煉瓦の残骸の中から，領主エテルピ・アダト王の王子エンリル・アブラ・ウシュの銘文入り煉瓦が出土したことから，同王子であった可能性が高い。しかし，単葬墓とするには豪勢すぎることや同煉瓦が同王子の煉瓦造棺に使用された可能性もあり，他の領主一族も埋葬されていたと考えられる。築造年代は同王が在位した前12世紀中頃で，盗掘時期は主室埋積土から出土した土器から前11世紀中頃と推測される。

アッシュル王墓との関連であるが，アッシリア歴代王の追善儀式を執り行った旧宮殿床下で発見された中・新アッシリア王の6基の地下式煉瓦造墓と構造が酷似している。中でも中アッシリアのアッシュル・ベル・カラ王墓の規模・構造は，タバンの墓と全ての面で共通しており，タベトゥがアッシュルの臣従国であったことを明示している。タバンの中アッシリアに臣属した前13世紀から焼成煉瓦を使用した中庭，排水溝等を備えた日乾煉瓦造公共建物の建造が始まるが，このことは地方拠点タベトゥを重視したアッシュルの政策により建造物の拡充がなされたことを示唆している。恐らくアッシュルから各種技術者・職人を派遣し，タベトゥの様々な建築物の造営に従事させたと思われる。

5-5. アッシリア東部辺境のエリート層埋葬と中央部の関係：ヤシン・テベの事例を中心に

西山 伸一

本発表では，イラク共和国クルディスタン地域にあるヤシン・テベ遺跡の成果からアッシリアの中央部と周縁部の関係性を考察した。ヤシン・テベは，2016年より中部大学を中心とするYasin Tepe Archaeological Project（YAP）が発掘調査を実施してきた。2017年には，アッシリア帝国時代の未盗掘のレンガ墓が「下の町」南東部で発見された。

これまでの成果から，ヤシン・テベは，アッシリアのザグロス侵攻のために築かれた拠点都市であったと考えられる。ヤシン・テベは，アクロポリスを中心に同心円状の「下の町」が広がる形状を呈している。この都市プランはZincirli Höyük, Tell Ahmar, Arslan Tash, Tell Rifa'atにも見られ，アッシリア系の都市プランに一定の形態があった可能性を示唆する。

「下の町」で出土したエリート層の邸宅は，「下の町」にもエリート層の居住区があったことを示し，この地区で今後さらなるエリート層の邸宅や公的建造物が出土することが推測できる。

上記のエリート層の邸宅の北西部で出土したレンガ墓は，シャフト部と墓室からなり，墓室はヴォールト式天井をもっていた。墓には二時期の埋葬があり，後期のものはテラコッタ製バスタブ型棺をとまっていた。レンガ墓はアッシリア中央部でみられるエリート層の埋葬形態であり，ヤシン・テベの事例は，それが帝国の東部辺境にも及んでいたことを示す。

墓から出土したバスタブ型棺や副葬品（土器，青銅器，ガラス器，ビーズ類など）にもアッシリア中央部と共

通する要素が見て取れる。特筆すべきは、墓室奥壁に造られたニッチに安置されていた青銅製ランプである。これはニムルドの「女王たちの墓」から出土したものと酷似しており、帝国中央部との強い関係をうかがわせる。また邸宅の別室から出土した楔形文字碑文つきの青銅製首飾りは、アッシリアで隆盛であったナブー神の神殿がヤシン・テベにあった可能性を示唆する。さらに、アッシリアの文化を示すものとして、アッシリア様式の円筒印章が捺された封泥、アヒル型重りがある。これらは、交易に関連した遺物であり、アッシリアの影響下でモノの移動・管理が行われていたことを示している。

このようにヤシン・テベには、アッシリア中央部との強い結びつきを示す建造物、遺物が出土しており、帝国の東部辺境にあって中央部の文化的影響を強く受けていた。しかし、同時に在地やイラン方面の文化に由来する文物も出土しており、今後はより総合的な研究が必要といえる。

5-6. 鉄器時代IIB期の北イスラエルの物質文化：外来的要素とその背景

小野塚 拓造

アッシリア帝国の版図が最も拡大した前8世紀後半から前7世紀において、帝国の南西隅の「周縁」に位置したのが南レヴァントである。考古学の編年では、この期間は鉄器時代IIB期～IIC期に相当する。近年、この時期の考古学データをもとに、アッシリアの進出を示す物質文化の特徴、アッシリアの影響が及んだ地域の居住パターンや経済活動など、帝国の「周縁」にせまる研究が相次いで出版されている。本発表では、こうした研究成果の中から、アッシリアに関連する拠点であったと考えられているアシュドド（Ashdod）とテル・ジェンメ（Tell Jemmeh）で発掘された建造物などを取り上げ、南レヴァントの物質文化に見られるアッシリアの影響について紹介した。

次に、テル・レヘシュ（Tel Rekhes）で出土している外来的要素を示す出土物と、鉄器時代末期に年代づけられている大型建造物について、近年の研究成果を踏まえつつ、再検討を試みた。その結果、1) テル・レヘシュではアッシリア様式の土器、メソポタミア地域との関連性が指摘される装飾をもつ土器などが出土しているが、これらは鉄器時代IIB期後半（前8世紀末～前7世紀前半）に属する可能性があり、2) 鉄器時代末期と年代づけられてきた大型建造物はアッシリア支配期以降に位置づけるのが妥当であるという見解が示された。

第3部：中央における「周縁」の吸収

5-7. アッシリア王室書簡における使者

伊藤 早苗

アッシリア帝国では、遠隔地での情報収集や交渉・外交等は、主に使者を通して書簡や口頭によって行われていた。一人の使者が最終目的地まで行くことがあれば、使者がリレー方式で交代して書簡を運ぶこともあった。使者は幹線道路である「王の道」やそれに付随する宿駅を利用するだけでなく、さらに王室印章指輪（*unqu*）を提示、もしくはそれが押された書簡を運ぶことで、宿駅で使役動物を乗り換えたり運び手を交代したりする速達サービス（*kalliu*）を利用することができた。このような情報は、アッシリア帝国の首都カルフとニネヴェから出土した前8-7世紀に年代付けられるアッシリア王室書簡から断片的に確認されているが、その詳細は未だ研究されていない。

そこで本発表では、アッシリア帝国の使者と書簡通信システムの解明を目的とし、まず使者として用いられるアッカド語の用語とその類語を提示した。最も一般的な用語は *mār šipri* で、さらに7つの類語も挙げた。これらの使い分けについては、今後検討してゆく。次にアッシリア王の使者の場合、「王の護衛」と一般的に訳される *qurbūtu* という職名を持つ者が担う事例が多いことを紹介した。使役動物にはラバ、馬、ロバ、ラクダが使われ、基本的に一人一頭の使用になるが、速達サービスの際はラバ2頭を1ペアで使用し、その使用スタイルも騎乗だけでなく、チャリオットが用いられた可能性も指摘した。「王の道」については、言及される用語を複数挙げ、センナケリブがニネヴェ内の「王の道」について記述した王碑文を提示した。宿駅の用語も二つ挙げ、郊外では宿駅は地方都市や集落に設置され、大都市や州都では宿駅という用語が用いられないため、何らかの建物が宿駅

の代わりを果たした可能性を指摘した。宿駅の維持・管理・運営は、それが位置する州の現地の総督、もしくはアッシリアから任命された高官 (*šaknu*) が担っていたことを示した。速達サービスについては、人員や動物等の装備を元々あった宿駅に返却する必要がある、州の総督にその責任があるものの、アッシリア王の命令で設置し、速達サービスを提供できない場合は王による批判の対象になることを明らかにした。

5-8. 「周縁」としてのバビロニア：文書蒐集事業を例に

前島 礼子

Core と periphery という概念はイマニュエル＝ウォーラスティンが1970年代に17世紀後半以降の近代資本主義国家による世界の分業体制支配を分析した世界システム論からきている。彼は、17世紀以前は「世界帝国」の時代だったと述べ、両者の違いは膨大な官僚制に裏打ちされた政治的直接支配があるかないかであるとした。この理論に基づいて、紀元前10世紀以降のアッシリアを「世界帝国」だと考えられるか否かは、広範囲に広がる官僚機構による直接支配、中央に向かい安い労働者と物資が一方向に流れるシステム、多文化、の三つがあるかによる。本発表では、南部バビロニアから北部アッシリアへの図書館文書流入を例に、アッシリアをcoreとして、「安い労働者と物資が一方向に流れるシステム」はあったかを検証した。

バビロニアの宗教や学問に関する文書がアッシリア領内に本格的に流入するのは、紀元前14世紀半ばのアッシュルウバリト一世以降である。紀元前11世紀ごろに何らかの形でまとめて収蔵された可能性があるアッシュル神殿出土の中期文学テキストの中にはバビロニア語で書かれたものが含まれる。この頃はあくまでも知の担い手である専門家込みの移動であり、一時的な戦利品としての流入が基本であった。その上専門家は高待遇で迎える必要があり、「安い労働力」とは言えなかった。

それが紀元前7世紀センナケリブによるバビロンの破壊、エサルハドンによる再建を経た後、専門家をバビロニアに留め置いたままバビロニアの知をアッシリアへと流入させるシステムができる。エサルハドン時代には、パルボラが言う「アウトサークル」のバビロニア人専門家が、バビロニアにいるまま占星術の知をアッシリア王に提供した。更にアッシュルバニパルの治世になり、前648年に内乱を制圧した後本格化する文書収集事業においては、バビロニアの図書館文書を大量に仕入れたことがわかっている。フィンケによると、合計で約1,500～1,700程度の粘土板または書版が、他の地域からの物品と同様にリストで管理されてバビロニアから流入した。後世のコピーにはなるものの、アッシュルバニパルがバビロニアの専門家に文書の供出を促す書簡も複数見つかっている。つまり新アッシリア時代後半には、バビロニアの専門知もその担い手である専門家や家族からは切り離し、統治機構のシステムに乗せて「安く」中央に向かって流れる「物資」の一つにした、と言うことができる。

5-9. アッシリアにおける外国人の法的活動

菊地 咲

紀元前一千年紀のアッシリアでは、複数の外国人グループの定住化が確認されている。その主要な集団の一つが、アッシュルに定住したエジプト人である。「エジプト人アーカイブ」と呼ばれるアッシュル南西部の個人住宅から発見された楔形文書群には、彼らの活動が記録されている。本発表では、このアーカイブ出土の裁判文書をもとにアッシリアにおける外国人の法的活動について考察する。

このアーカイブ出土の文書にエジプトの神名を含む人名が継続的に登場することや、同住宅からスカラベが発見されていることから、エジプト人たちは、アッシュル移住後も文化的独自性をある程度保持していたと推察される。一方で、「エジプト人アーカイブ」の裁判文書を新アッシリア時代の標準化された裁判文書と比較すると、使用される粘土板の形式・記録される法定手続き・裁判の対象・文書の書式に差異はなく、エジプト人たちのアッシリアの法的実践への同化が進んでいたことがわかる。ただし裁判の日取りについては、アッシリアの慣習からの逸脱がみられる。アッシリアにおいて、裁判の日取りはその日の吉凶や活動規定を示す暦注と連関しており、吉日が優先された。しかし、「エジプト人アーカイブ」出土のエジプト人同士の離婚を扱った裁判文書は凶日に作成されている。同様の現象は、エジプト人同士の婚姻契約を記した婚姻文書の日付にも確認できる。外

国人の婚姻が凶日に行われた新バビロニア時代ボルシッパの事例をふまえると、日の吉凶を問題としない婚姻手続きは、エジプト人が移住後も婚姻法に関する法的独自性を保持していたことを示唆する。

アッシリアにおける婚姻と離婚は、家父長的な婚姻法に基づき花婿と花嫁の父親の合意により定められた。これに対しエジプトでは、女性は男性と法的に同等に扱われており、婚姻・離婚は当事者の合意のもと行われた。また、エジプト人女性のアッシュルにおけるワイン取引への参与から、エジプト人コミュニティが移住後も女性たちに伝統的な独立性を保証していたことが確認できる。

以上から、アッシュルにおけるエジプト人コミュニティは、基本的にはアッシリアの法的実践に準じた文書の作成や裁判活動を行う一方で、女性の権利についてアッシリアの慣習と大きく異なる婚姻法については、移住後も一定の法的独自性を保っていたと考えられる。

5-10. アッシリアにおけるエリート外国人の宮廷教育

佐野 克司

アッシリア学の有力な研究者シモ・パルボラは、新バビロニア時代とアケメネス朝ペルシア時代に確認されるエリート外国人を対象とした宮廷教育が、新アッシリア時代に既実践されていた事実を明らかにした（1972, 1988, 2003）。アッシリアの宮廷教育を理解する上で、パルボラの研究がもっとも重要なものであることに疑問の余地はないが、彼が証拠として挙げた複数の事例は、新アッシリア時代末期の王たちの治世に限定されており、どの王の治世からなぜこのような政策が実施されるようになったのか、また新アッシリア時代全体でどれほどの事例が確認されるのか、という問題が未解決のまま残存している。そこで報告者は、現存する史料の中から関連する事例を網羅的に収集し、これらの問題の解明を試みた。

調査の結果、アッシリアの宮廷で教育を受けた人物が後に属国王として任命されたことを明確に示す、あるいは示唆する事例が合計19例確認された—その内の8例は宮廷教育に関する先行研究において取り上げられていなかった。そして、アッシリアが採用したこの特殊な政策は、サルゴン2世からアッシュルバニパルの時代に、地理的・経済的・政治的な理由から、アッシリアの主たる支配政策であった「一般住民を対象とした強制移住」を避ける必要があった国においてのみ実施されていたことが判明した。アッシリアの宮廷は、アッシリアの支配が及んだ領域が、人や物によって表象された特別な空間であった。強制的に連れてきた、あるいは自発的にやってきたエリート外国人に対するこの空間での教育は、彼らにアッシリアの強さや恐ろしさを心理的に植え付け、アッシリアに抵抗する気持ちを取り去ると同時に、彼らが属国王として祖国に帰国した後もアッシリア王に忠実に奉仕するように、アッシリアのエリートメンバーとしてのアイデンティティを持たせることを目的としていた。アッシリアの宮廷で教育を受けた人物が、属国王として任命されたことを確認できるのはサルゴン2世の治世になってからであるが、将来における間接支配の確立ないし維持を企図したエリート外国人の宮廷教育自体は、アッシュケロンの王ルーキブトゥから彼の息子の身柄を受け取ったティグラトピレセル3世によって開始されたと考えられる。

参考文献

- Parpola, S. 1972: "A Letter from Šamaš-šumu-ukīn to Esarhaddon," *Iraq* 34/1, 21–34.
- Parpola, S. 2003: "Assyria's Expansion in the 8th and 7th Centuries and its Long-Term Repercussions in the West," in W. G. Dever and S. Gitin (eds.), *Symbiosis, Symbolism, and the Power of the Past*, Winona Lake, 99–111.
- Parpola, S. and K. Watanabe 1988: *Neo-Assyrian Treaties and Loyalty Oaths*, Helsinki.

第3部会

1. ScanPyramidsプロジェクトにおけるクフ王ピラミッドの切妻構造背後を対象とした宇宙線イメージングについての報告

森島 邦博・久野 光慧・眞部 祐太・北川 暢子・西尾 晃

2015年よりエジプト考古省およびカイロ大学が主催するScanPyramidsプロジェクトにおいて、宇宙線イメー

ジング（宇宙線に含まれる素粒子「ミューオン」を用いた巨大構造物内部の非破壊イメージング技術）を屈折ピラミッドおよびクフ王のピラミッドに対して適用して調査を行ってきた。2016年、クフ王のピラミッド北面の切妻構造下部に位置する入口から南方向に続く下降通路に、宇宙線を検出する特殊な写真フィルム「原子核乾板」を設置して、その上部を宇宙線イメージングにより可視化した。その結果、切妻構造の背後周辺（設置した検出器の上部）に未知の内部構造（空間）を検知した。2017年には、女王の間に設置した原子核乾板によるイメージング結果から、女王の間から40 m程度上方（大回廊の上部）に未知の巨大空間（大回廊と同程度の断面を持ち南北方向に30 m以上の大きさ）を検知した（K. Morishima et al., *Nature* 552 (2017), 386）。発見した2つの空間の詳細な三次元形状を明らかにするために、2018年から原子核乾板による大規模観測を実施している。大回廊上部に発見した巨大空間の観測のために、大回廊の両側の複数地点に原子核乾板を設置した。さらに、地下の間にも原子核乾板を設置し、女王の間の周辺部および下部の領域も探査の対象とした。

本発表では、切妻構造の背後に発見した空間を対象とした宇宙線イメージングについての報告を行う。2018年から2019年にかけて、下降通路およびアルマムーンの通路（観光客が出入りするために使用されている通路）の複数地点に原子核乾板を設置し、原子核乾板に宇宙線を記録したのちに回収し、カイロのGrand Egyptian Museum Conservation Center（GEM-CC）にて現像を行った。現像後の原子核乾板は、名古屋大学で分析した。下降通路に設置した原子核乾板からは、発見した空間を真下から捉える宇宙線イメージが得られるため、空間の幅や位置、南北方向の長さの高精度な分析が可能となる。また、アルマムーンの通路の壁の窪みに原子核乾板を設置することで、斜め方向から見た空間の宇宙線イメージが得られるため、空間の位置および傾きの推定が可能となる。現在、これらの観測結果から、数十センチ以下の精度で空間の三次元形状の推定を進めている。

2. クフ王の時代に考案されたピラミッドにおける切妻構造に関する考察

河江 肖剽

古王国時代第4王朝初期の王のピラミッド建造では、玄室の位置が地下ではなく地上より上に建造されるようになる。その結果、部屋に掛かる重量を軽減させるために、天井にいくにしたがい内側にせり出すように積む「持送り構造」や巨大な石材を用いて山形の形状の「切妻構造」などが考案された。煉瓦造の持送り構造の屋根は、第2王朝時代の上エジプトの墓で確認されているが、石造としてはスネフェル王のメイドウムに造営したピラミッドの埋葬室が最古の類例として知られている。この王がダハシュールに建てた2基のピラミッドではこの技術の発展が見られ、屈折ピラミッドの下部玄室では、エジプトのピラミッドの中で最も高い部屋となる高さ約17 mの天井が設けられ、赤ピラミッドの前室と玄室では洗練された天井を見ることができる。スネフェル王の後継者であるクフ王の大ピラミッド内部では、この技法はさらに発展し、長さ約47 m、高さ約9 mの持送り構造を持つ大回廊が建造された。しかしこの構造はクフ王の治世に新たに生み出された切妻構造に取って代わられる。

切妻構造は大ピラミッドでは北面入口、王妃の間、王の間で確認されている。持送り構造の発展と同じように、一世代の間に様々な発展を見せている。最初に造られた切妻構造は北面の入口であり、奥行き2層と、その上に、少なくとも3層からなる2つの垂木の構造体からなっている。この構造はその下に位置する空間に掛かる重量を拡散するためのものだと考えられているが、ここでは空間は見つかっておらず、下降通路に繋がる正規の入口は、構造体から約3メートル下に位置している。次いで造られた王妃の間の天井の切妻構造は、直接部屋にその構造体が載っており、おそらくそのために周囲の壁、特に南面に亀裂が生じている。大ピラミッド内部に最初に造られた王の間と関わる切妻構造は、また異なる方法で設置されており、重量拡散の間と呼ばれる5層の空間の上に設けられている。

弊調査チームGiza 3D Surveyは、オープンイノベーション・プロジェクトとして民間企業の協力を得て、2016年から18年に掛けてUAV-SFM手法によるギザのピラミッド群のGNSS測量を行った。その後、数年間の解析を経て、クフ王のピラミッドでは10,415枚の写真を用いて2,055,435,863点の高密度詳細な三次元データを生成した。本発表ではこのデータの一部を用いて、こういった歴史的なコンテキストのなかで、北面の切妻構造

についての考察を提示した。

3. 供物儀礼における媒体間の関係構造—エジプト古王国時代の石製モデル容器と供物リストの対応関係—

竹野内 恵太

エジプト古王国時代の第5王朝半ばから後半にかけて、80個体前後の石製モデル容器セットがmastaba墓の埋葬室に共通して副葬された。この定型的・定数的な石製モデル容器セットを副葬する意味を巡って、主に①同時代の供物リストの内容を象徴した擬似供物、②リストとは無関係、とする2つの意見がある。そこで本発表では、石製モデル容器の器形組成と構成点数を整理し、供物リストの内容および項目数と詳細に比較することで、いずれの意見の蓋然性が高いかを検証した。

分析の結果、石製モデル容器（円筒形壺や片把手壺、ビール壺、ワイン壺、Nmst壺、鉢類、供物卓など）と供物リストには確かに対応関係が認められ、前者は後者の内容をある程度反映させた器物であることがわかった。時系列的に見ても、もともと第4王朝以来に副葬習慣のあった石製モデル容器に対して、第5王朝半ば頃に供物リストを反映させた定型的なセットとして再解釈した可能性が高い。しかしながら、双方の関係はそう単純ではなかった。というのも、例えばある儀式で本来使用されるはずの容器は互換性のある別の容器によって代替していたり、複数の儀礼行為からなる儀式的冒頭部分のみを表示することによって他を省略していたりする事例があった。この両者の関係構造は、ピラミッド・テキストや供物リストを対象とした碑文研究で用いられるEntextualizationの概念的枠組みを援用することによって説明可能である。つまり、第4王朝末～第5王朝初頭に現れたList Type Aの内容と第5王朝半ばの石製モデル容器セットの関係は、テキスト間に認められた伝達習慣と同様に、省略・代替・補完した関係構造の習慣があったと想定した。

また、このリストの参照によるセット構成の再解釈は、同時期である第5王朝半ばの被葬者のカーに対する呪術的な食糧供給の増加やオシリス信仰の出現とおそらく無関係ではなかった。この時期には、既往の壁画分析からカーに対する呪術的な食糧供給が増加したと考えられている。この背景には、非王族におけるオシリス信仰の受容、つまり被葬者の身体とカーが墓に留まるという思想から双方が分離してカーが来世へ向かうという来世観の変容があった。この状況と同じく、定型化した供物リストが呪術的な食糧供給を企図していたのであれば、その効果を高めるために、埋葬室でそれを三次元的に表現した供物儀礼のハードとして石製モデル容器セットを再解釈したと捉えた方がよいだろう。

4. 墓壁画からみた古王国時代の家族と女性像

畑守 泰子

エジプト古王国時代の私人墓の壁画には、墓主（主に男性）とその家族の姿が数多く描かれているが、登場する家族のうち、妻や子に次いで多いのが墓主の母親である。本報告では、母の図像が多く見られるギザ墓地の私人墓の墓壁画を中心に、母親の図像とその登場場面の特徴をまとめ、そこに込められた意味について考察を試みた。

母親の図像が残る墓は、第4王朝から第6王朝までの期間でおよそ50あり、ギザに集中している。その数は妻の姿が登場する墓の1/10程度にすぎないが、描写からは母が妻に準ずる扱い、ないしは妻以上に重視されていた様子もうかがえる。

母親の姿が比較的多く見られるのが、第4王朝の王族と第5・6王朝の中・下級役人の墓である。柱や入り口付近に母親が単独で描かれる場合と、墓主または他の家族と共に祭儀室の壁面に描かれる場合があるが、その登場場面は次の4種のパターンに分類できる。①何らかの儀式に赴く墓主と母を表したもの。第4王朝の王族の墓にのみ見られる。②墓主と母の対面、またはふれあいの様子を表すもの。墓主が子どもの姿で表される例もある。王族や高官など、父が複数の妻を持つ場合で、同腹の兄弟姉妹と一緒に登場する例もある。③母単独ないし墓主と母、または父母が供物卓の前に座す場面。主に祭儀室の西壁や偽扉に母（や父）の供養（供物分与）を目的として描かれたと考えられる。中・下級役人の墓に多く認められる。④墓主と母が並び立つ、ないしは母が単独で立つ

ている図。様々な場面を眺める構図が多く、第5-6王朝期の私人墓に広く見られる。③を除くケースでは、母が墓主の肩を抱く、腕を絡めるなどの身体的接触が、全体の1/5の例に見られる。同様の仕草が全体の半数以上を占める妻と比べ割合は少ないものの、妻と母で仕草自体にさほど違いは認められない。

私人墓の墓壁画は、墓主の生前の功績を示すとともに、来世の復活と生活に役立つと考えられた図像が描かれたものであり、家族の像も例外ではない。母親は妻と同様望ましい家族像の一翼を担うものであり、そこには母を中心とする家族の紐帯を強調する意図も垣間見える。それはまた、母親の側にとっても供物分与などのメリットを伴うものであった。なお、4種のパターンは、いずれも第4王朝のギザの王族の墓壁画に原型があり、それがギザ墓地を中心に私人墓にも波及したものと考えられる。

5. 幾何学的形態測定学から見たエジプト中王国時代末期の土器形状の地域性とその変化 矢澤 健

古代エジプト中王国時代は、デルタ地域でのアジア人集団の勢力拡大に伴いメンフィス・ファイユーム地域の王朝が力を失い、その支配層がテーベに移動した時点で終焉を迎える。この出来事は第13王朝中期頃に起こったと考えられていたが、近年では、メンフィス・ファイユーム地域からテーベへの支配層の移動はなかったという見解がある。第13王朝から物質文化の地域差が進展しており、テーベ地域にも独自の系統が存在していたという見方が、支配層の移動を否定する1つの根拠となっている。

最も出土量の多い土器は特に地域差に関する議論で取り上げられることが多い。各地の土器の類似性についてはしかし、現状土器の形状から判断せざるを得ず、似ている／似ていないという感覚的な議論に客観性を持たせることが難しかった。

そのため本発表では第12王朝後期から第13王朝にかけて頻出する壺形土器「ビール壺」を対象に、幾何学的形態測定学の1手法である楕円フーリエ解析と主成分分析を応用してその地理的変異の可視化を試みた。この手法は型式学的な細分に依拠せず、形状同士の差異を数値で表現できるという利点がある。完形の資料のみを対象とし、エジプト全土の出土例を集めその外形をデータとして利用した。分析の過程で実測図の左右非対称性が結果に大きく影響を与えてしまうことが判明したので、土器が轆轤成形である事実から片面の外形だけを採用し、反転させて左右対称の図として分析に使用した。

分析の結果、第13王朝中期からデルタとテーベで形状の差異が鮮明になることが分かった。注目すべきはテーベ地域の通時的变化で、第13王朝初期はメンフィス・ファイユーム地域の形状とはやや離れた値を示すが、第13王朝中期ではそれ以前のメンフィス・ファイユーム地域に近い値が得られた。これは第13王朝中期におけるメンフィス・ファイユーム地域とテーベ地域のビール壺形状の近似を示すものである。両者の類似は発表者が過去に指摘していたが、これを数理的手法から裏付けることができた。この結果を即座に当時の支配層の移動に結びつけることは早計だが、土器職人を同伴する程の集団の移動があった可能性を示す1つの根拠として注目される。

6. エジプト中王国時代以降における装身具を捧げる儀礼の伝統と再解釈 山崎 世理愛

本発表では、中王国時代以降の装身具を死者へ捧げる儀礼は、当時の必要に応じていかに変容・再解釈されていったのかという点を考えた。

主に中王国時代前期～中頃の棺内面に描かれたオブジェクト・フリーズには、食糧以外の器物奉獻儀礼に用いられる様々な器物が図像と文字によって示されており、それらを描くこと自体が棺上における儀礼の執行を意味していた。そこで、当時の儀礼の中で装身具がどのように扱われていたのかを明らかにすべく、オブジェクト・フリーズ上の装身具類の描写傾向を分析した。その結果、装身具の種類によって描写頻度には差異があり、中でも襟飾り、襟飾り用錘、幅広腕輪・足輪、赤色樽形ピーズが「主要セット」として頻繁に描かれ続けることが分かった。その他の装身具は、アメンエムハト2世治世頃以降の棺に頻繁に描かれるようになるものもあるが、王権の象徴と結びつく特定の装身具は主に中部エジプトの棺に偏重して描かれ、エジプト全土では描写頻度は常に低い

ことが判明した。続いて、中王国時代後期を中心に実際に副葬された装身具の出土傾向を分析したところ、上記のオブジェクト・フリーズの分析結果とは異なる傾向が見られた。すなわち、被葬者の社会的地位や地域によって装身具の副葬状況には大きな差があり、上述した装身具の「主要セット」はごく限られた者へのみ副葬されていた。ただし、王権の象徴と結びつく特定の装身具に関しては、実際の出土例もほぼ確認されなかった。中王国時代後期には、中央集権化に伴って地方統治体制は解体され、王宮に従属する官僚が国家行政を担っていく支配体制が発展した。それに従い中央の官僚が増加あるいは組織体制に変化が生じ、改めて社会的地位の格差を表示する必要性が出てきたと推測できる。そして、こうした政治的転換期に際して、特定の儀器的利用に格差を与えることで社会関係を再生産した可能性が考えられる。つまり中王国時代には、中央集権の強化という側面に応じて新たな社会関係を再生産する手段として、装身具を捧げる儀礼が再構築された上で実践されたということである。さらに、装身具を捧げる儀礼と密接に関わる図像が描かれたと言われる第二中間期のリシ棺には、王権の象徴と結びつく特定の装身具が表されていたことから、中王国時代とは異なるかたちで装身具を死者へ捧げる儀礼が再び解釈し直され取り入れられていた可能性についても言及した。

7. 古代エジプトの「死者の書」における「否定告白」についての一考察

肥後 時尚

古代エジプトの「死者の書」第125章は、古代エジプトの来世思想を示す「死者の裁判」を描いた呪文であり、エジプト新王国時代以降の重要な葬祭文学である「死者の書」のなかでも特徴的な呪文に位置づけられている。この呪文において、死者はオシリスによる審判に先立ち、陪審員である42柱の神々に対して自らの生前の振る舞いの潔白を宣言する。「否定告白」や「無実の宣言」と呼ばれるこの場面は、数多くの「死者の書」に描写されることから、その重要性が広く知られている。しかし、個々の「死者の書」の写本の内容に大きな相違点はないとする従来の認識から、「否定告白」の場面はこれまで詳細に議論されていない状況にあり、近年の研究において再検討の必要性が提示されている。

このような背景から、本発表では新王国時代第18王朝に利用された「死者の書」を対象として、「死者の裁判」のイメージが図像として表現された初期の時代における「否定告白」について考察を試みた。特に、「否定告白」がなされる場である「二柱のマートの広間」の図像的特徴に注目し、広間の描写形式と広間に登場する「二柱のマート」と呼ばれる神々の姿の考察を行った。考察の結果、従来の見解に反して、第18王朝の「否定告白」の場面は、史料ごとに異なる特徴が看取された。「否定告白」がなされる広間の記述形式には、後の時代の「死者の書」に見受けられる表や文章による記述形式と異なる「枠形式」と呼ばれる形式があることが明らかになった。また、同時代の「死者の書」に描写された「二柱のマート」の図像は、後の時代において一般的となる二柱の神々の姿だけでなく、巨大なミイラの姿の立像や、それぞれの図像上に個々の女神の特徴を示す文字が付記された図像で描写され、第18王朝における「二柱のマート」の図像表現が変化に富むことを明らかにした。さらに、一部の「死者の書」では、その他の後の時代の「死者の書」においてオシリスが描写される祠堂の中に「二柱のマート」の図像が描かれ、「二柱のマート」の重要性が強調されている点を指摘した。これらの「二柱のマート」の多様な描写は、「否定告白」の場面の文章化と図像化がなされた第18王朝において、死者の裁判に携わる神々としての「二柱のマート」の役割と図像表現が模索の段階にあった可能性を示している。

8. マーラゴムワ貯水池から見た古代スリランカ貯水灌漑システムの崩壊原因についての一考察 鈴木 慎也

スリランカの北半分を占める乾燥地域では、古代から多くの貯水池や水路が築造されてきた。これらを基盤とした貯水灌漑システムは、上流からの排水を下流で用水として反復利用することを可能とした画期的なものであった。しかし、この貯水灌漑システムは13世紀以降、急速に衰退・崩壊し、穀倉地帯は再び密林に飲み込まれてしまう。先行研究では、13世紀以降、水管理に関する碑文が残されていないことを根拠に、外敵の侵攻とそれに伴う管理体制の破綻が貯水灌漑システムの崩壊を招いたとする説が有力視されてきた。しかし、この説は

碑文史料を大きな拠り所とする一方で、貯水池や水路などの水利施設についてはほとんど分析を行っていないことから、検討の余地が残されている。

本発表では、数値地形モデル（Digital Terrain Model、以下DTM）を用いてGISで作成した微地形図から、ワスゴムワ国立公園内のマールゴムワ貯水池の規模と貯水能力喪失までの過程について検討した。マールゴムワ貯水池は、NPO法人南アジア遺跡探検調査会の遺跡探査によって、初めて本格的な調査がなされ、ポロンナルワ期（11～13世紀）に年代づけられる2つの排水施設が発見されている。まず、全体像を確認するため、2.5 mメッシュのDTMを用いて微地形図・傾斜量図・流路網を作成、1インチ1マイル地形図（1936年刊行）、排水施設の位置情報をオーバーレイし、分析を行った。その結果、マールゴムワ貯水池の推定規模（湛水面積：約139 ha、有効貯水容量：約507万 m³、受益面積：約93.1 ha）が明らかとなった。また、1インチ1マイル地形図上の河道と算出した流路網の比較により、20世紀前半までマールゴムワ貯水池は、貯水能力を保持していた可能性が高いことが明らかとなった。

本研究により、13世紀以降も貯水能力を保持した大型貯水池がスリランカの乾燥地域に残存していたことが明らかになるとともに、現地調査で得られた知見と高精度DTMを用いることで、放棄された貯水池の規模推定が可能であることが示された。今後は、この地域全体を俯瞰的にみた分析を進め、13世紀前後の水利施設の様相の解明に取り組んでいく所存である。

9. 高句麗と日本をつなぐ濊人

下山 繁昭

魏志濊伝の記述に倭国と似た風習があるので論述する。濊伝の記述：「無大君長自漢已來其官有侯邑君三老統主下戸」（訳：略その官に侯邑君、三老があり、後略）。高句麗では三本足の鳥が王家の紋章である。三を尊ぶのはエジプト由来のものである。また次の記述では「其邑落相侵犯輒相罰責生口牛馬名之為責」（訳：その集落どうして侵害行為があったときは、生口や牛馬で賠償させる）とある。魏志倭人伝にも倭人の生口の記事がある。「名之為持養、若行者吉善共顧其生口財物若有疾病遭暴害便欲殺之」（訳：この名を持養と言う。もし、旅するもので吉善なれば共に生口・財物を顧し与う、後略）。倭国と濊の社会に生口の身分制度があった。又濊伝の記述に以下のようにある。「其俗重山川 山川各有部分不得妄相渉入」（訳：その習俗は山川を重んじる。山川はみだりに入ることが出来ない所がある）。これは、日本の入会権と似ている。又次の記述は「作矛長三丈 或數人共持之能歩戰樂浪檀弓出其地 其海出班魚皮土地饒文豹又出果下馬漢桓時獻之」（訳：長さ三丈（7.2 mほど）の矛を作る。数人がかりでこれを持ち、歩いて戦うのが得意である。樂浪檀弓はここで産出する。中略、（小さな）果下馬がいて、漢の桓帝の時これを献じた）。これは、日本の銅矛の祭りに残存している。果樹の下をくぐるほどの小さな馬の記述、日本に小型馬である木曾馬がいるのでよく似ている。中国の濊人の記録がある古代の地理書に晋の著作郎、郭璞（カクハク）の『山海經』海内経第十八条の記録に「東海之内北海之隅有國名朝鮮、天毒（天竺）其人水居倭人愛人」とある。訳は、「東海の中（黄海沿岸）北方の隅に朝鮮と言う国がある。そこにインド人がいる。水辺に住んでいる。倭人（ワイ）と愛人がいる。」当時インド人と同居していた。客家語で倭人は「アイベン」と発音している。この時期倭人と濊人は黄海沿岸で活躍していた。

後の時代であるが、濊人が日本にきた確かな考古遺物に和歌山県橋本市隅田八幡宮人物画像鏡の銘文がある。『癸未年八月十日、大王年男弟王、在意柴沙加宮 時、斯麻念長、奉遣開中費直穢人今州利二人等、取白上同二百吳、作此竟 癸未年』（503年説をとる；訳：前半略、開中費直と穢人（ワイ人）の今州利との二人を遣わして奉る）とある。

まとめ：魏志濊伝と魏志倭人伝とを分析すると濊人と倭人の文化に似ている所があり、鏡作りに穢人が確かに関係していた。

第4部会

1. 死地蘇生と村落共有地の運用をめぐる9世紀半ばマーリク派法学の学説比較

—Ibn Abī Zayd al-Qayrawānī 『Kitāb al-Nawādir wa-l-ziyādāt』を素材として—

早矢仕 悠太

本報告ではまず、マーリク派法学と統治者の関係の前提として、従来の研究が、政治史上における両者の相互依存関係と、学説上の一種の法的技巧としての統治者の役割という2つの潮流にもとづいていることを確認した。その上で本報告は、法学説の中でも統治者の権能が言及される、村落外縁部の牧草地や薪の集積地を含む荒地地の分割請求権と継続占有という、死地と村落共有地に関する規定をめぐる境界的な事例に焦点を当てながら、以下の2点を詳らかにした。一つは法学者が自らのテキストにおいて、統治者の利益を学説や法学理論の中で体系化する試みがあったこと、もう一つは、マーリク派法学説史の中で権威とされる同派初期法学者らの間で、統治者の権能に関する理解に微妙な差異が生じていることを指摘することである。その結論として、マーリク派初期法学者らにとって村落から近い荒地地の処分は統治者の裁量に服するという通説に則りつつも、さらに同地を村落の承役地とみなすことの可否が論点として挙げられ、統治者の裁量の範囲をより類型化しようとする傾向が把握できた。同時に、両者の学説上の対立は統治者の土地の所有権に対して始原的な役割と、自身の裁量によって土地の現状を追認しその流通に資する調整的な役割といった異なる統治者像の理解を示唆していた。

本報告に対する質疑では、取り上げたイブン・ハビーブの学説について、彼の他の学説が通説から距離をとっていることと本報告での比較可能性について、死地や村落共有地に類する土地が実際にいかなる運用をされていたのかという質問が挙げられた。前者では、本報告での彼の学説における初期の権威学説への注釈方法は、マーリク派法学の慣行に沿うものであり、法対象によって通説からの距離が異なる彼の学説全体の評価は、彼自身の手による単一のテキストが現存しない以上、写本を含めた統合的な学説収集による研究を俟つほかない。後者の疑問については、北アフリカ・アンダルスではマーリク派法学者らによるファトワー集が数多く編まれて、同地に処遇に関する内容が散見されることは確認しているが、それらを射程に入れた本報告で提示した法学者らの統治者理解の妥当性については、報告者の今後の課題となった。

2. シャーフィイー法学派「ハディースの徒」とハンバル法学派「ハディースの徒」：ハディースをめぐる11世紀の論争

森山 央朗

「ハディースの徒 (Aṣḥāb/Ahl al-Ḥadīth)」とは、9世紀のイラクにおける伝承主義者で、後のハンバル法学派に発展したと説明されることが多い。しかし、シャフラスターニー (1153年没) は、『宗派と教派』の中で、「ハディースの徒」の主流がシャーフィイーの支持者たちであったことを示唆する。「ハディースの徒」とシャーフィイー法学派との結びつきは、先行研究によっても指摘されている。発表者も、これまでの研究において、10世紀のホラーサーンに遡るシャーフィイー法学派の学統が、11世紀にジバル、イラクへと広まり、この学統に連なるハディース学者たちが「ハディースの徒」を名乗ってスンナ派ハディース学の発展に大きく貢献したことを確認した。とはいえ、この時代の「ハディースの徒」が一致してシャーフィイーの思想・学説を支持していたわけではない。例えば、ハンバル法学派のハディース学者たちは、しばしばシャーフィイー法学派の同僚たちを「ハディースの徒」から逸脱していると批判した。

本発表では、11世紀に活躍したシャーフィイー法学派「ハディースの徒」の中でも特に顕著な業績を残し、それ故に批判されることも多かった3名のハディース学者、ハーキム・アン＝ナイスアーブリー (1014年没)、アブー・ヌアイム・アル＝イスファハーニー (1038年没)、ハティーブ・アル＝バグダーディー (1071年没) を取り上げ、彼らに対するハンバル法学派「ハディースの徒」の批判を分析した。批判の概要は、ハーキムはシーア派に与し、アブー・ヌアイムとハティーブは「神学者」に与して、それぞれに正伝とすべきではない真正性の低いハディースを正伝としたというものであった。これらの批判は、シャーフィイー法学派とハンバル法学派の対立を前提とした多分に恣意的なものであるが、「ハディースの徒」内部のシャーフィイー法学派とハンバル

法学派の論争の次のような構造を示唆する。すなわち、「ハディースの徒」は、ハディースの真正性判定は党派性を排した中立・客観なものでなければならないということを共通認識とし、それ故に、「ハディースの徒」内部の論争では、相手を党派心のために信頼できないハディースの真正性を不当に高く主張したと批判することで、「ハディースの徒」としてふさわしくないと非難したのである。

3. 『医学典範』注釈における哲学的問題

矢口 直英

イスラーム世界における最大の哲学者・医学者イブン・スィナー（Ibn Sīnā, 1037年没）による『医学典範』（*al-Qānūn fī al-ṭibb*）はイスラーム世界でもヨーロッパでも高い評価を得て、後代の医学者に多大な影響を与えるとともに、注釈書や要約書など多数の派生文献を生んだ。本発表では『医学典範』における主要器官の定義とそれに対する注釈者たちの議論を例に、注釈における哲学的議論の意義を探索した。

イブン・スィナーは『医学典範』第1巻第1部第5教則で、主要器官について脳と心臓と肝臓を含めた医学者の分類を述べる。その一方で、彼は心臓を最優位に位置づけ、身体全ての能力は心臓に由来するとも言う。しかし、この真理を探究するのは哲学者の責務であり、医学者には相応しくないと主張する。この背景には彼の学問観があり、医学者は哲学者が論証した幾つかの原理を採用すべきだと『医学典範』でも明言される。

著者のこのような学問領域の線引きにもかかわらず、注釈者たちは心臓が無条件の主要器官であることを議論する。ラーズイー（Fakhr al-Dīn al-Rāzī, 1210年没）は第5教則への注釈の最後で「論証を行う」と明確に言って、この問題を扱う。魂が1つであることと最初に生成する器官が心臓であることという2つの前提に基づいた論証から、彼は哲学者の見解を支持する。イブン・ナフィース（Ibn al-Nafīs, 1288年没）もまた哲学者の側に立つが、哲学者の論拠のうち魂が1つであることとそれが全ての能力の起源であることについて、医学書において確かめるべきでないと行ってその議論を避け、魂と身体の結び方に関する独自の見解に基づいた結論を出す。シーラーズイー（Qutb al-Dīn al-Shīrāzī, 1311年没）はイブン・ナフィースの議論に依拠するが、その過程で両派閥の論拠を各々吟味しており、魂に関する哲学者の議論を検討している。この点で彼も哲学的議論を積極的に行っていると言える。

注釈者たちは共通して医学の範疇を超えた哲学的議論に取り組んでいる。これは、ラーズイー以来注釈書において真理の探究がなされるようになったことだけでなく、古代以来の医学と哲学の領域のせめぎ合いが、哲学者が医学書を、医学者が哲学書を読む時代において具体化した1つの事例と評価することができるだろう。

4. イブン・スィナーの論理学における全称命題について

法貴 遊

全称命題、すなわち〈全てのAはBである（kull A B）〉という形式の命題に関するイブン・スィナー（Ibn Sīnā, d. 1037）の主張とそれに関連する議論を考察した。

アリストテレス本人の立場に基き、イブン・スィナーは、「全てのA（kull A）」は「A」という語で記述される1つ1つのものを指すのであって、諸部分から成る集合体（jumla）としてのAを指すのではないと主張する。1つ1つのものとしてのAに付けられる述語が集合体としてのAにも述定されるとは限らないからだ。このアリストテレス伝統に反し、古典期カラームの学者らは両者の区別を否定した。彼らは集合体を、部分を包括する上位概念ではなく、むしろメレオロジーの総和のようなものとして捉えたので、この区別は意味をなさない。この区別の否定は、個々の原子や偶有に対する「一時的に存在させられた（muḥdath）」という述語を、それらのメレオロジー的総和である世界全体に拡張するために必要であった。

またイブン・スィナーは、全称命題が具体的に指示する対象を確定するため、一般化（ta'mīm）と特殊化（takhṣīs）という概念を導入した。kullという数量詞が主語に付かなくても、「人間は動物である」という命題に見られる「人間」という語は複数の人間個体を指示しうる。このような語を彼は普遍語（lafẓ kullī）と呼んだ。普遍語としての「人間」は1つの単語として見ると、1人もしくは複数の人間個体が、概念としての人間を指示する。

だが、この語を主語にして命題を作成する際、この語が具体的に何を指示するのかを明確にしなければならない。普遍語が概念ではなく外界の個体を指示する場合、イブン・スィーナーはその具体的な指示範囲を一般化と特殊化という操作で確定したと思われる。

またkullという数量詞が主語に付いていても、直ちに全ての1つ1つのものが指示されるとは限らない。「全ての動くもの」という事例を考えてみよう。動くもの(mutaḥarrik)という分詞形は、バスラ系カラムの作法と同様に、「それに動きがある(lahu ḥaraka)」という一文に分析される。つまり、「動くもの」は基体(hu)とその属性(ḥaraka)に分割可能であり、全ての事例において、この2つが揃っているとは限らないのだ。

イブン・スィーナーは、それ自体でみると普遍的な指示機能を持つ単語が何らかの命題の中に置かれることで、限定された指示対象を持つことを論じている。つまり、彼の論理学は具体的な状況に置かれた命題を対象としている。

5. ヒッタイト文書における「魂」とその移動のイメージ

山本 孟

本発表では、ヒッタイト文書における人と神の「魂」にかんする表現を取り上げて、前2千年紀ヒッタイト王国時代のアナトリアにおける死後世界のイメージを理解することを目指した。特に、『人間の魂の旅』(CTH 457.7.1)をはじめとする、古期・中期ヒッタイトの文書中にあらわれる「魂」とその移動についての比喩的な描写を整理し、前帝国期アナトリアにおける死後世界のイメージについて考察した。

前帝国期に作成された文書の「魂」にかんする表現からは、人間と神の魂が本質を共有するものと考えられていたと理解できる。また「魂」の一側面として、液体のイメージがあったことと、アナトリアの神々のなかには、その魂が光り輝くもののように語られる神があったことを確認した。さらに、生死にかかわらず、人間の魂は移動するものとして語られることがあった点も明らかになった。『人間の魂の旅』では、人間の魂が死して体を離れ、この世からあの世に移ることを表していた。また古期ヒッタイト由来の祈祷文書では、存命中の人間の魂が悲しみから体を離れて「別の場所」へ染み出すと述べられる。魂は、水に流れたり、地に染み出したりして消え、「自己」を失ってしまう。このような魂が自己を失ってしまう世界というイメージが、前帝国期ヒッタイトにおける冥界観の一側面であったと思われる。

「冥界」が「暗黒の地」であるというフリ由来の考え方は、中期ヒッタイト時代以降の死者世界の一側面であったことは確かであるが、「冥界」＝「暗黒の地」を前提とすると、それ以前に冥界の概念が存在しないことになる。前帝国期の魂にかんする比喩表現からは、「見えない」死後の世界が想定されていたように思われる。メソポタミアの冥界観やフリの「暗黒の地」という地下世界の考え方は、そのような従来のアナトリア的な世界観の上に受容されたものであった可能性を指摘した。

6. アーザル・カイヴァーン学派の起源

青木 健

アーザル・カイヴァーン学派に関する先行研究は、アーザル・カイヴァーンと云う思想家の思想史上の位置付けに困惑している。16世紀イラン思想史にも適切に位置付けられないし、17世紀インド思想史にも落とし所がない。ゾロアスター教思想史の産物ではなさそうだし、イスラーム思想史の産物としても違和感が残る。

2010年代後半以降、幾つかの突破口（と考えられる研究成果）が得られた。結論から要約すれば、先行研究は、アーザル・カイヴァーン学派の知的営為の全てをアーザル・カイヴァーンと云う個人に帰着させていたが、これが間違いだったのである。デリー・サルタナット朝期の北インドには、彼の先駆者が複数存在していた。「アーザル・カイヴァーン学派的な要素」を因数分解して、それぞれの起源を辿っていくと、インド・ペルシア語辞書やフェルドウスィー教団との関係など、デリー・サルタナット朝期の北インドに行き着く。現状で確実に言えるのは、所謂「アーザル・カイヴァーン学派」を「イラン発の知的運動」と捉えるよりは、「ペルシア語文化に深く影響された北インド発の知的運動」と捉えた方が、遥かに合理的だということである。

アーザル・カイヴァーンの個人史で唯一重要な論点は、彼の宗教的な出自である。北インドのペルシア文化至上主義に裨差す人物は、ゾロアスター教徒だったのだろうか？ だとしたら、彼の動機の理解は比較的簡単である。或いはイスラーム教徒だったのだろうか？ この場合、イスラーム文化を犠牲にした上で、ペルシア文化至上主義を唱えた特異なイスラーム教徒と理解せねばならない（スクタヴィー派がこれに該当するが、彼らの「出イラン」は1593年とかなり遅い）。ヒンドゥー教徒だった可能性も捨て難い。ペルシア文化愛好とイスラームに対する明確な敵意は、彼が非イスラーム教徒だった可能性を増幅させている（Persophone Hindu か？）。

発表者は、13世紀以降のインド・ペルシア語辞書に見られる（想像上の）古代ペルシア語文化への嗜好を、アーザル・カイヴァーン学派の起源だと考える。アッバース朝期にペルシア文化を重んじたシュウビーヤ運動になぞらえるなら、デリー・サルタナット朝期に北インドで古代ペルシア語文化を重んじた「北インド・シュウビーヤ運動」が、アーザル・カイヴァーン学派の起源ではなからうか。

7. イギリスからオスマン帝国への難民支援：1864年のチェルケス人支援委員会による募金活動と義捐金寄付

成地 草太

本報告の目的は、1864年5月におけるロシアの北コーカサス征服で生じたチェルケス人難民に対するイギリス政府・民間の諸支援を、オスマン帝国の難民定住政策の文脈に位置付けるために、ロンドンで設立された慈善団体チェルケス人支援委員会（Circassian Aid Committee: 1864–65）の事例から検討することにあつた。1864年のイギリスによるチェルケス人難民支援に関する研究の現状は、イギリス政府・民間の反応に焦点があてられるものの、こうした支援をオスマン帝国のチェルケス人難民定住政策の文脈で十分に位置づけて論じられてこなかった。こうした研究史上の欠を補うべく、本報告では上述の委員会の募金活動と義捐金の配分を、オスマン・イギリス両国の定期刊行物や一部オスマン帝国公文書を史料として、とくにオスマン帝国が1860年1月に設置した難民定住の行政機関、難民委員会（Muhâcirîn Komiyonu: 1860–65）との関係から明らかにした。

第一に、イギリスにおけるチェルケス人支援委員会による募金活動の性格について検討した。その募金活動は、反ロシア派の立場にたって展開された一方で、実は1830年代以来イギリス政府の対オスマン・ロシア政策、さらにチェルケス人問題にかかわった人々によって支えられていたことが明らかになった。第二に、チェルケス人支援委員会の義捐金がオスマン帝国でいかに配分されたのかについて検討した。その義捐金の配分は、イスタンブル在住のイギリス人医師J・ミリングン（Julius Millingen: 1800–78）を代理人として、その権限の下で進められた。ミリングンがロンドンに送付した報告書を検討すると、実際にはミリングンはイスタンブルの難民委員会と相談・交渉をしながら、チェルケス人難民への義捐金の配分方法を決定した。結果として、ミリングンによる支援の多くは難民委員会が求める衣類や毛布などの形で難民委員会へと提供された。

難民委員会は、チェルケス人支援委員会の義捐金のほかにも、政府とイズミル鉄道社が提供した支援をも受け取り、黒海沿岸の港で困窮するチェルケス人難民のために配分したといえる。換言すると、難民委員会は国内からだけでなく、外国から寄付された義捐金や物資も一手に受け入れた組織であることが明らかになった。すなわちイギリスの難民支援はオスマン帝国の難民定住政策の文脈のなかで配分されたのであった。

8. イタリアにおけるエチオピア人種・民族論の展開

石川 博樹

19世紀末から20世紀初頭にかけての「アフリカ分割」においてイタリアはリビア、エリトリア、ソマリア東部を植民地とした。イタリアはエチオピアの征服も試みたものの、1896年のアドワの戦いでエチオピア帝国軍に敗北を喫し、その野望は挫かれた。独立を維持したエチオピア帝国では、皇帝の出身民族集団であるアムハラがオロモをはじめとする他の民族集団を支配する構造が形成され、現在まで続く民族集団間の反目が生まれた。「アフリカ分割」の中で独立を維持したエチオピアの諸民族集団は、当時ヨーロッパで盛行していた人種研究において「黒人種より優れたハム人種」という位置づけがなされた。

1922年にイタリアで政権を奪取したムッソリーニ率いるファシスト勢力は、1935年にエチオピアへの侵攻を開始した。そしてイタリアは1936年5月にエチオピアと周辺の植民地をあわせて「イタリア領東アフリカ」を樹立した。しかし第2次世界大戦が勃発すると、1941年11月にイタリア領東アフリカは瓦解した。イタリア領東アフリカでは民族集団分布に基づく行政区分が導入された。この行政区分の立案と導入の背景、およびこの行政区分の導入がその後のエチオピアの諸民族集団に与えた影響については研究が進んでいない。本発表ではそれらの解明作業の一環として、イタリア王国成立後のイタリアにおける東アフリカ人種・民族研究の展開、およびイタリアのエチオピア人種論、特にハム人種概念に対する認識の変遷について検討を行った。得られた結論は以下のとおりである。

1860年代末からイタリア王立地理学協会による東アフリカ調査が開始され、さらに19世紀末から第2次イタリア・エチオピア戦争開戦までの期間に、イタリア領となった地域を中心としてイタリア人による民族集団・言語分布の研究が進んだ。中でもアフロ・アジア語族クシ語派に属する諸言語の研究においてイタリア人研究者の活躍は目覚ましく、彼らの研究活動によって同語族の分類の基礎がつけられた。このような東アフリカを対象とするイタリア人の調査・研究の結果、1930年代後半においてイタリアはこの地域の民族集団に関して他のヨーロッパ諸国に比べてより正確な情報を保有することになった。その一方でこの時期までにエチオピアの諸民族集団を「黒人種より優れたハム人種」とする人種概念がイタリアではいち早く廃れたことを確認できる。

第5部会

1. 古ヌビア語の母音音素体系と声調の再建：現代ヌビア諸語を手がかりとして

宮川 創

古ヌビア語は、アフリカ中部を中心に話されているナイル・サハラ言語ファイラム（完全な系統関係が証明されていないが、ナイル・サハラ語族とも呼ばれる）のうちの東スーダン諸語、そしてそのうちのヌビア諸語に属する言語である。この言語は、中世ヌビアのキリスト教三王国、すなわち、ノバティア王国、マクリア王国、アロディア王国にて、コプト文字に3種類のメロエ民衆文字を付け加えたヌビア文字で書かれ、キリスト教関連の羊皮紙写本や碑文などの書記記録が現存している。古ヌビア語の直系とされる現代語としては、現代エジプト、および、スーダンに話者を有するノビーン語（Werner 1987）があり、ノビーン語以外にも、系統関係に近い、ドンゴラウィー語（Armbruster 1960）、クヌーズ・ヌビア語（Abdel-Hafiz 2009）などの現代ヌビア諸語が存在する。本発表ではBrowne（2002）、Smagina（2017）、van Gerven Oei（2021）などの研究によって提示された古ヌビア語の音素体系、特に母音の音素体系を再検討した。古ヌビア語の語彙を、現代ヌビア諸語の対応語と比較しながら、未解決だった古ヌビア語の母音字重複（同じ母音字の繰り返し）の音価の推定を試みた。その結果、母音字重複は長母音を表していた可能性が高いことが確認された。古ヌビア語の母音字はコプト語で用いられている母音字と同じであり、母音＋声門閉鎖音を表す（Layton 2011など）のか、長母音を表す（Peust 1999など）のかが未解決のコプト語における母音字重複の音価について、それが長母音であるとする説を支持する一つの傍証となった。さらに、現代ヌビア諸語は声調を有するため古ヌビア語にも声調があったと考えられるが、古ヌビア語の声調の研究は未だなされていなかった。そこで、本発表では、最後に、現代ヌビア諸語と古ヌビア語の比較の結果から、古ヌビア語の声調の再建の可能性についても論じた。そこでは、発表者は、古ヌビア語の声調を十分再建しうる現代ヌビア諸語の語彙の声調の記述データが未だ不十分であるため、現代ヌビア諸語の声調に関してより多くの記述的研究がなされるべき旨を述べた。

参考文献

- Abdel-Hafiz, A. S. 2009: *A Reference Grammar of Kunuz Nubian*, Saarbrücken: VDM Verlag Dr. Müller.
Armbruster, C. H. 1960: *Dongolese Nubian: A Grammar*, Cambridge: Cambridge University Press.
Browne, G. M. 2002: *Grammar of Old Nubian*, Munich: LINCOM GmbH.

van Gerven Oei, V. W. J. 2021: *A Reference Grammar of Old Nubian*, Leuven: Peeters.

Layton, B. 2011: *A Coptic Grammar*, 3rd ed., Wiesbaden: Harrassowitz.

Peust, C. 1999: *Egyptian Phonology: An Introduction to the Phonology of a Dead Language*, Göttingen: Peust und Gutschmidt.

Smagina, E. 2017: *The Old Nubian Language* [original: *Древнениубийский язык*; publication year: 1986; translated by José Andrés Alonso de la Fuente], Santa Barbara, CA: Punctum Books.

Werner, R. 1987: *Grammatik des Nobiin (Nilnubisch): Phonologie, Tonologie und Morphologie*, Hamburg: Helmut Buske Verlag.

2. ペルシア語における無対自動詞と無対他動詞に対応する使役動詞
五十嵐 小優粒

本学会の第61回大会で、日本語の受身について考察した野村（1982）にある、「無対他動詞の欠損している自動詞の用法を受身動詞が補っている」という記述に着目し、ペルシア語の受身も同様の機能を有していると主張した。この機能は、無対自動詞と使役動詞の関係にも同様のことが言える。ペルシア語でも、無対自動詞の欠損している他動詞の機能を使役動詞が担っている動詞がわずかながらある。

本研究では、黒柳（1996）とDabīr-Moqaddam（1985）から抜粋した使役動詞と、それに対応する自動詞や他動詞を分析の対象とする。もっとも、「無対自動詞の欠損している他動詞の機能を担っている使役動詞」は、無対他動詞と受身に比べれば数は非常に少ない。上記の資料から抽出して確認できたのは8語であった（pažmorāndan, pekāndan, jahāndan, xārāndan, xamāndan, šokūfāndan, māsāndan, vazāndan）。

さらに問題の所在として、ペルシア語で使役動詞の語尾とされている「-āndan, -ānīdan」が付く動詞でも、他動詞とされているものと使役動詞とされているものとがあり、用例も文語しか見当たらないものも多く、現代ペルシア語の中でのふるまい方が不確かなものが多々あることが挙げられる。

自動詞	他動詞	使役動詞	
pajmordan (しおれる)	×	pajmorāndan (しおれさせる)	←欠損している他動詞の機能を使役動詞が補っている。
×	pūšīdan (着る) pūšāndan (着せる)	pūšāndan (着せる)	←使役形のpūšāndanが他動詞と使役動詞の両方を担っている。また、「着る」という他動詞もある。
xābīdan (寝る)	xābāndan (寝かせる)	xābāndan (寝かせる)	←同上。ただし、他動詞のみの形式はない。

そこで本発表では、使役形の動詞についてペルシア語母語話者の協力を仰ぎ、他動詞と使役動詞のすみ分けを考察した。無対他動詞が使役動詞であるものは、「(自分で) 服を着る」という他動詞に加え、例えば親が子供に「服を着なさい」と命じる場合と着替えを手助けする場合があり、他動詞と使役動詞の2種類があると考えられる。有対動詞の他動詞と使役動詞の違いについても、「寝なさい」と命じる場合と「寝かしつける」行為の2通りがあるためだと主張した。

3. クルド語ソーラーニー方言における「ペシュメルガ」型の不定名詞表現の研究
村上 武則

本発表ではまずクルド語ソーラーニー方言についての基本情報としてクルマンジー方言とは異なり全体の話者人口中に占める第二・第三言語話者の割合が極めて大きい言語であることと、ソーラーニー方言はクルディスタン南部の威信言語であったゴラーニー語の影響により形態統語上の変化を経た変種であることを述べた。続いて民兵組織の名称である「ペシュメルガ」（死に向かう者）の語末母音に当たる -e がクルド語ソーラーニー方言における不定名詞句を形成する機能を持つこと、これがクルマンジー方言の関係詞的な機能を有する遊離エザー

フェの用法と類似していること、および同様の語形成を有するいくつかの例について概観した上で、指示（形容）詞の被修飾語に対して付加される -e や名詞と後置冠詞付きの形容詞を連結するエザーフェに酷似した -e との比較対照を行い、これらが指示や定性に関する限定を受けて独立した名詞となっているのに対して「ベシュメルガ」型の不定名詞は前置詞による限定を受けて名詞として成立しているという解釈を提示した。これによりクルド語の後置冠詞 -eke, -ekan の最初の -e も再分析されうることと言及し、名詞に -e の付加された形と指示、定性、前置詞による限定の結び付きによる共通の語形成パターンを見出すことが出来るという主張を行った。さらに既に -e を有する「ベシュメルガ」型名詞と指示形容詞や後置冠詞付き形容詞との結合についても検討し、指示形容詞の場合は -e で終わる被修飾名詞に -ye が追加で付加される一方で、後置冠詞付き形容詞の場合には -e の重複が見られないことを報告したが、これが単なる音声面での省略現象なのかそれとも2つの -e の間に語源的な違いに基づく機能上の相異がある故なのか未だ解明出来ていない。また「名詞 + -e + 後置冠詞付き形容詞」を逆転させた「形容詞 + -e + 後置冠詞付き名詞」型の名詞句が若干数ながら存在することに対しては本発表の主張を一貫して適用することは難しい。最後に同様の語形成パターンを持つゴラーニー語や南部クルド諸語との比較研究が必要であることを今後の課題として述べた。質疑応答では「限定」という用語の曖昧性の問題や、「名詞 + -e + 後置冠詞付き形容詞」型の名詞句と周辺のセム諸語の構成形による名詞句形成との関係および類型的研究の可能性について議論がなされた。

4. アラビア語文法における一般化と限定や種との関係

榮谷 温子

ここでは主に、名詞文主語 (mubtada') が非限定の場合についてのアラビア語文法書の記述を検討し、特定 (ḥ-ṣ-ṣ) の対概念である一般 ('m-m) という用語の使用の変遷を明らかにする。さらに一般化と限定との関連、種 (jins) の概念との関わりを考察する。

特定化という用語は、アラビア語文法学初期は文法用語として使われていなかったことが、既に先行研究で明らかだ。結論から言えば、一般化という用語の使用はそれよりさらに遅れる。

また、限定詞 al- を伴う名詞句に、al-'ahdiyyah (既知を指示) と al-jinsiyyah (種を指示) の区別があり、特定化は前者と非限定との中間的存在、一般化は後者と非限定との中間的存在と捉えられようが、種を示す名詞句の扱いでは、総称指示と不特定指示が混同されがちだった。

さて、al-Mubarrad (d. 285/898) や Ibn Sarrāj (d. 316/929) は、名詞文主語は限定、あるいは、非限定よりも限定に近づいたものでなければならないとして、後の特定化にあたる記述をするが、一般化は記述していない。al-Zamahṣārī (d. 538/1144) は、非限定の名詞文主語が修飾されていない場合として、のちに一般化とされる例を挙げ、Ibn Yaʿīṣ (d. 643/1245) は、非限定主語が疑問や否定で使われた際、「非限定が一般 ('umūm) の意味を帯び…それを名詞文主語とすることが許される」と 'umūm の表現を用いた。その後、Ibn Hišām (d. 761/1359) が、非限定の名詞文主語を特定 (ḥuṣūṣ) と一般 ('umūm) に明確に二分し、後者について、名詞文主語が一般の形式の場合と否定文の例を挙げた。

このような、'm-m (一般) の語根を用いた用語の使用状況と、種を示す名詞句の扱いとには時間的な一致が見られる。例えば、種を示す固有名詞 ('alam jinsī) が限定名詞句かどうかの議論では、総称指示と不特定指示が混同され、種を示す固有名詞は長らく非限定とされてきたが、Ibn Hišām が遂に、種を示す固有名詞も限定名詞句と規定した。

種 (jins) の概念の確定時期と一般 ('m-m) の用語の使用との関連は、さらに検討が必要だが、両者の連関は蓋然性のあるものと考えられる。

5. 初期イスラーム時代の碑文に見られる「プロト・ハムザ」について—サウジアラビア北西部ワディー・アルヒルカの新資料の考察を中心に— 徳永 里砂

アラビア語において、現在の形のハムザ（声門閉鎖音を表す記号）が記されるようになるのは、紙の普及とともにスルス書体、ナスヒー書体が主流となる10世紀後半～11世紀初頭のことで、それ以前のハムザについては未だに不明な点が多い。イスラーム以前のナバテア文字によるアラビア語の碑文では声門閉鎖音に「アレフ」の文字が当てられていた一方、ヒジャーズ書体による最初期のクルアーン写本にはハムザが記されず、後に色付きの点を用いてそれを表す試みが出現した。伝統的見解では、色付き補助符号のイラク起源が主張されてきたが、近年の写本研究においては、それがウマイヤ朝初期（7世紀後半）のシリアに遡る可能性が指摘されている。

一方、7～9世紀には数多くの碑文が石や岩壁に刻まれていた。2011年、アンバールは主にこれらの資料の中から新種のハムザを発見し、「プロト・ハムザ」と名付けた。その後、シュダイファート、シャッデルらによりプロト・ハムザに新例が加えられ、現在、計10例が確認されている。そのうち年代の明らかな資料は全てヒジュラ暦1世紀（7世紀半ば～8世紀初頭）に遡る。シャッデルは、プロト・ハムザが旧ナバテア領内にのみ分布することから、この地域のアラビア語の方言との関連性を説き、それを初期アラビア語の正書法に存在したが消滅した地域的特徴のひとつと捉えた。

本発表ではプロト・ハムザについて、既存例に加え、既刊行史料からの新たな2例とサウジアラビア・日本合同調査隊（隊長：藤井純夫金沢大学特任教授）が発見したタブーク州北部ワディー・アルヒルカ（以下ヒルカ）碑文群の新例2点を考察した。ヒルカも旧ナバテア領内の遺跡である。ヒルカの2点のハムザは語末の短い下線で、前例のない形状を呈す。同遺跡の他の碑文との相対年代から推測すると、ヒルカのハムザは既存例よりも新しく、8世紀初頭～半ば過ぎに位置付けられる。

新例を含めると、プロト・ハムザの形状は5タイプ（A-E）に分類される。それらが同一書法の中で用いられたか否かは不明だが、少なくとも8世紀半ばまで、旧ナバテア領内にハムザを表記する考え方が存在したことが明らかとなった。また、7世紀半ばに出現したプロト・ハムザ（タイプA）は、次いで現れるクルアーン写本の補助記号のハムザに形状や配置が類似するため、そのプロトタイプであった可能性も考えられる。

6. アラブ詩における韻律学（アルード）の形成と展開：ハリール学派による15律式説を中心に 竹田 敏之

アラブ韻律学は、例証の時代（5世紀半ば～8世紀）の言語データをもとに、バスラの文法学者ハリール・イブン・アフマド（791年没）がその基礎理論を確立した。ハリールが発見したとされる韻律の15の型式（律式）は、現代に至るまで韻律学の骨子であり続けている。また、通説では弟子のアフファシュ・アウサト（830年没）が新たな韻律（ムタダーラク調）を発見し、それを追加することでアラブ韻律学の標準としてのハリール学派が成立したと言われている。

しかし、現存するアフファシュの著作にはムタダーラク調に関する記述自体がなく、この説には大きな疑問が残る。また、ハリールは15律式を示す「韻律円」を考案し、第5サークルをムタカーリブ調の円としたが、その円にムタダーラク調の韻律も含まれていることは外観からも容易に看取できる。この時点でハリール自身がその存在を知らなかったとは、とても考え難い。

フロロフの先行研究などでも、ムタダーラク調の起源に関する問題が指摘されている。しかし、その成立期や15律式への追加の根拠に関する記述は乏しく、「ムタダーラク調は古典詩にはない理論上のフィクションである」と述べるに留まっており、上記の疑念に対する十分な答えを得ることはできない。

本発表では、この問題を解決するために、まず15律式と韻律円の理論を整理し、次にムタダーラク調の追加の経緯について考察を行った。具体的には、アフファシュ以降の主要な韻律学書（22点）を分析対象とし、ムタダーラク調に関する記述と例証（詩の用例）を時系列データとしてまとめた。韻律円におけるムタダーラク調への示唆は10世紀（イブン・アブドゥ・ラッビヒ著『類稀なる首飾り』など）から見られるようになるが、章立てと

して安定するのは12世紀から13世紀、すなわちザマフシャリーやイブン・マリークらによる教育重視の文法学が普及した時期にあたる。

また、ムタダーラク調の特徴として、ハリールが確立した変則（イッラ）の理論から逸脱する点があること（最末詩脚でのみ許容されるはずのカトウと呼ばれる変則〔長短長→長長〕が、詩行の内部詩脚でも頻繁に起こる）を指摘した。このことがムタダーラク調排除の直接的な理由と断定できるわけではないが、韻律円を基軸に構想したハリールの15律式は、韻律の使用実態や詩作における実用性よりも、正調に依拠した韻律理論の一貫性とその規範の提示に重きを置いていたと考えられる。

7. 北西セム諸語におけるQTL形動詞の文法化：歴史言語学理論に基づく状態動詞から動態動詞への発展

佐藤 潤

北西セム諸語におけるQTL(-)形動詞（接尾辞活用動詞）の意味研究と言語学再構（historical reconstruction）については、テンス／アスペクトの議論を中心にこれまで様々な提案がなされてきた。本稿の目的は、歴史言語学における文法化理論を用いて、より精練された言語学再構のモデルを示すことである。

本研究ではまずBauer, Driver, Cookなどの先行研究を整理し、問題点を挙げていく。特に、適切な歴史言語学理論の必要性、また形態論やテキスト分析をベースとしたより客観的な検証の必要性が本研究には不可欠であることを確認する。その後、歴史言語学者Heineの文法化理論を紹介し、アッカド語、カナン諸語、古代ヘブライ語、古代アラム語、現代ヘブライ語など、古代から現代に至るまでの北西セム諸語のQTL(-)形動詞の分析を行う。結論として、下記の三段階の特徴を観察する。

〔第一段階〕セム祖語において、*QTL(-)形は、幹母音（/a/, /i/, /u/）にかかわらず、状態動詞としてのみ機能していた（参考：アッカド語）。

〔第二段階〕初期の古代北西セム諸語（アマルナ書簡のカナン語、聖書ヘブライ語など）においては、状態動詞としての旧機能と新たに獲得された動態動詞としての新機能がQTL(-)形に共存している（具体的には、幹母音が/a/ならば、動態動詞であり、/i/あるいは/u/であれば、状態動詞）。第二段階は遅くとも紀元前1000年頃には始まっている。

〔第三段階〕後期古代北西セム諸語（ミシュナーヘブライ語など）においては、QTL(-)形が元来持っていた状態動詞としての旧機能が欠落し、幹母音（/a/, /i/, /u/）にかかわらず、QTL(-)形は動態動詞としての機能のみを有するようになった。第三段階は遅くとも紀元200年頃に始まっており、その発展はその後現代に至るまで各言語によってさまざまな形を見せている。

この三段階の特徴は、文法化理論の中心的枠組みと合致しており、北西セム諸語における形容詞的動詞（状態動詞）から動詞（動態動詞）という文法化を理論的に証明するものと言える。また本研究が提示する言語学再構モデルには二つの変化が生じているが、それぞれの時期がパレスチナ世界と異なる世界（バビロニア世界とヘレニズム世界）との歴史的接点が生じた時期と重なることは決して偶然ではないであろう。言語の変化を促す主要因が言語間の接触であることは知られているが、本モデルは、世界史的出来事とも合致するものである。

8. エジプトにおける女子割礼をめぐるグローバル・ディスコースと現地の現実

ー日本とエジプトにおける変化の見通しー

ヘバタッター・オマル

女子割礼は、世界の多くの地域で0歳から15歳の女子に対して行われており、女性の健康に関わる問題として、国際連合児童基金や世界保健機関などにより問題視され、女性研究とジェンダー研究のトピックとして議論されてきた。本稿では、女子割礼の実施率と医療化率の高いエジプトにおける女子割礼に焦点を当てた。エジプトにおける女子割礼の意味と位置づけを明らかにし、映画『二つの海の間（ビーイン・バーレーン：Bein Bahrain）』という映画による他者表象や、グローバルとローカルの考え方の食い違いが廃絶運動に及ぼす影響とその危険性

を明らかにした。その結果、ゼロ・トレランス政策はエジプトの女子割礼の廃絶には適していないことが明らかになった。さらに、世界保健機構が分類する Female Genital Mutilation の4つのタイプとは別に、世界には第一世界での実施と第三世界での実施の2つに大別される女子割礼と変わらない施術が行われていることから、ゼロ・トレランス政策および持続可能な開発目標を再考する必要があるという結論に至った。